

令和3年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

—令和3年度国庫補助事業—

令和4年（2022年）3月



茨木市教育委員会

序 文

私たちの住む茨木では、北半部は老ノ坂山地の麓で、南半部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれたベッドタウンとして過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安心・安全なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢のなか、開発に伴う埋蔵文化財の調査は全国的に減少傾向にあるのに対し、本市では緩やかながら増加しています。

本書は、令和3年度に実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書です。これら一つひとつを積み重ねた調査成果が、郷土茨木の歴史遺産として広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりましては、土地所有者、施工関係者、近隣住民の皆様にご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

令和4年3月31日

茨木市教育委員会

教育長 岡田祐一

例 言

1. 本書は、令和3年度国宝重要文化財等保存・活用事業費市内遺跡発掘調査等事業（総額6,409,000円の内、国庫3,204,000円、市費3,205,000円）として実施した個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。令和3年度として、令和3年4月1日から令和4年3月31日までの期間で発掘調査及び整理作業を実施した。ただし本書では、整理作業の都合から令和3年1月から令和3年12月末までに発掘調査を終了したものを対象に報告する。
2. 調査の実施は、本市教育委員会歴史文化財課調査管理係職員木村健明、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、正岡大実、宮西貴史があたり、阿部ともよ、川西宏実、川畑康雄がこれを補助した。
3. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、正岡が編集にあたった。第3章第7節の自然科学分析については一般社団法人文化財科学研究センターに委託した。
4. 遺物、図面・写真等の記録は茨木市立文化財資料館〔〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 TEL072-634-3433〕にて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書で用いる座標値は平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づく。なお、各挿図に表示した方位のうち、特に表記のないものは座標北を示し、M.N.と表記したものは磁北を示す。
2. 本書で用いる標高値は東京湾平均海面（T.P.）を基準とする。
3. 挿図及び本文中の土色表記は、小山正忠、竹原秀雄 編著『新版 標準土色帖』（2014年版）に基づく。また、地層の粒度の記載に関しては、基本的にWentworth（1922）の区分を使用した。
4. 遺物の実測図のうち、弥生土器・土師器・石製品の断面は白抜き、須恵器は黒塗り、瓦器・瓦質土器の断面はアミカケで示した。
5. 本書における遺構、遺物の時期決定には主に以下の文献を参考とした。

森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』真陽社
古代の土器研究会編 1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』真陽社
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
間壁忠彦 1991『備前焼』考古学ライブラリー60 ニュー・サイエンス社

本文目次

序文	第2節 駅前遺跡・春日遺跡	10
例言・凡例	第3節 総持寺遺跡	14
目次	第4節 郡山遺跡	22
第1章 地理・歴史的環境	第5節 中条小学校遺跡・沢良宜城跡	25
第1節 地理的環境	第6節 溝咋遺跡・牟礼東遺跡	28
第2節 歴史的環境	第7節 東奈良遺跡 2020-2 出土木製品の自然科学分析	31
第2章 令和3年度調査地一覧	写真図版	
第3章 調査の成果	抄録・奥付	
第1節 茨木遺跡		5

挿図目次

図1 茨木市地質図	1	図21 出土遺物（総持寺遺跡2021-1）	20
図2 令和3年度発掘調査地位置図	4	図22 総持寺遺跡調査地位置図（2）	21
図3 茨木遺跡調査地位置図	5	図23 平・断面図（総持寺遺跡2021-2）	21
図4 調査区配置図（茨木遺跡2020-7・2020-8）	6	図24 郡山遺跡調査地位置図	22
図5 平・断面図・出土遺物（茨木遺跡2020-7）	6	図25 平・断面図（郡山遺跡2021-1）	23
図6 平・断面図（茨木遺跡2020-8）	7	図26 出土遺物（郡山遺跡2021-1）	24
図7 出土遺物（茨木遺跡2020-8）	8	図27 平・断面図（郡山遺跡2021-2）	24
図8 調査区配置図（茨木遺跡2021-1）	8	図28 出土遺物（郡山遺跡2021-2）	25
図9 平・断面図（茨木遺跡2021-1）	8	図29 中条小学校遺跡調査地位置図	26
図10 平・断面図・出土遺物（茨木遺跡2021-2）	9	図30 平・断面図（中条小学校遺跡2021-2）	26
図11 駅前遺跡・春日遺跡調査地位置図	10	図31 沢良宜城跡調査地位置図	27
図12 平・断面図（駅前遺跡2021-1）	11	図32 平・断面図（沢良宜城跡2021-1）	27
図13 平・断面図（駅前遺跡2021-2）	12	図33 溝咋遺跡・牟礼東遺跡調査地位置図	28
図14 平・断面図・出土遺物（春日遺跡2021-2）	13	図34 調査区配置図（溝咋遺跡2020-1）	29
図15 総持寺遺跡調査地位置図（1）	14	図35 平・断面図・出土遺物（溝咋遺跡2020-1）	29
図16 平・断面図（総持寺遺跡2021-1）	16	図36 調査区配置図（牟礼東遺跡2021-1）	30
図17 掘立柱建物2 平・断面図（総持寺遺跡2021-1）	17	図37 平・断面図・出土遺物（牟礼東遺跡2021-1）	30
図18 掘立柱建物1 平・断面図（総持寺遺跡2021-1）	18	図38 分析対象資料	31
図19 1面遺構断面図（総持寺遺跡2021-1）	18	図39 対象試料顕微鏡写真	32
図20 74・84土坑 平・断面図（総持寺遺跡2021-1）	19	図40 暦年較正結果（東奈良遺跡2020-2 木棺底板）	34

表目次

表1 放射性炭素年代測定結果 （ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）	33	表2 放射性炭素年代測定結果 （ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）	33
--	----	---	----

写真図版目次

図版1 茨木遺跡	図版5 春日遺跡	図版9 郡山遺跡
図版2 茨木遺跡	図版6 総持寺遺跡	図版10 郡山遺跡
図版3 駅前遺跡	図版7 総持寺遺跡	図版11 中条小学校遺跡
図版4 駅前遺跡	図版8 総持寺遺跡	図版12 溝咋遺跡・牟礼東遺跡

第1章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

茨木市は、大阪府の北部に位置し、南北 17.05km、東西 10.07kmと南北に長く、東西に短い形で市域を形成しており、北は京都府亀岡市、東は高槻市、南は摂津市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町に接している。市域は、北東―南西方向に走る有馬―高槻構造線によって、大きく南北二つに区分される。北半部はおおむね標高 300m 前後の秩父古生層系の岩石により構成される北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなる。南半部は、西側に標高 50～100m 前後の前期洪積層の隆起地形の一つである大阪層群で形成された千里丘陵が南北に伸び、東側に北摂山地を源とする安威川・佐保川・茨木川等によって形成された沖積層からなる三島平野が広がっている。

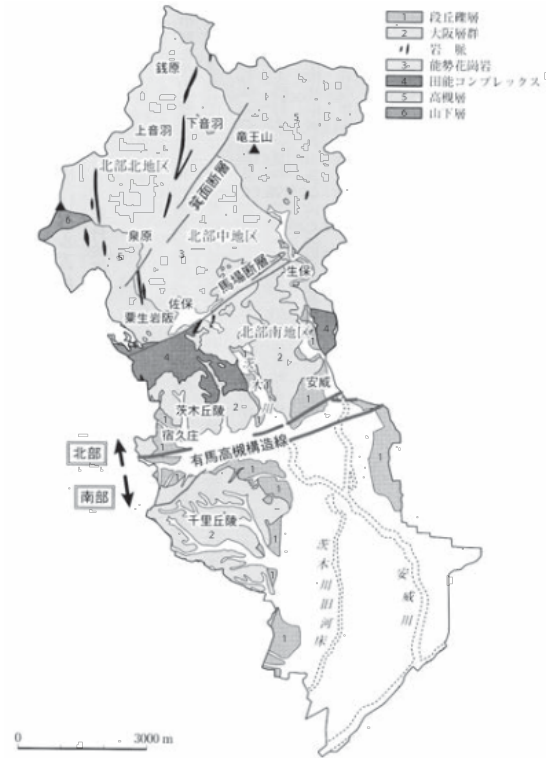


図1 茨木市地質図 (木庭 2012)

第2節 歴史的環境

ここでは、茨木市域における遺跡の分布やその内容を中心に、各時代の概要を時代順に述べておく。

旧石器時代 周辺地域に比べて希薄ではあるものの、太田遺跡から国府型ナイフ形石器や剥片類が採集されているほか、宿久庄遺跡や郡遺跡、佐保川流域ではナイフ形石器や尖頭器等が確認されている。

縄文時代 中期～後期にかけて、千提寺南遺跡や西福井遺跡、初田遺跡等の山地から丘陵部に立地する遺跡において遺構や遺物が認められている。晩期には遺跡数が増加し、耳原遺跡や五日市東遺跡、総持寺遺跡等の段丘ないし段丘縁辺部上のほか、牟礼遺跡や東奈良遺跡等の沖積平野上においても遺跡が出現するようになる。なお、耳原遺跡からは土器棺墓 16 基からなる墓域がみつまっている。

弥生時代 弥生時代になると遺跡数の増加が顕著になる。前期には東奈良遺跡、耳原遺跡、牟礼遺跡等の縄文晩期から続く遺跡のほかにも目垣遺跡、郡遺跡、倍賀遺跡等に集落が形成される。なかでも、東奈良遺跡は環濠を幾重にもめぐらせた集落を形成しており、質・量ともに極めて豊富な遺構・遺物が確認される等、弥生時代を通じて突出した内容を示す遺跡である。なお、東奈良遺跡からは国の重要文化財に指定されている石製銅鐸鑄型、銅戈・ガラス製品の鑄型、送風管等の中期の鑄造関連遺物が出土しており、集落内に高い鑄造技術をもった集団が存在していたものと推測される。中期の遺跡は、主要河川の両岸や丘陵部にまで広がり、中条小学校遺跡や中河原遺跡、太田遺跡、溝咋遺跡、春日遺跡等が出現する。後期には宿久庄遺跡、安威遺跡、総持寺遺跡等においても集落が展開する。

古墳時代 古墳時代に入ると、市域各所で様々な古墳が築造されるようになる。前期には、紫金山古墳・将軍山古墳が相次いで築造される。ともに後円部に竪穴式石室を持つ全長 100m を超す前方後円

墳である。中期になると、三島地域最大である太田茶白山古墳が造営される。全長 226 m、後円部径 138m の前方後円墳であり、現在は宮内庁により「三嶋藍野陵」として治定されている。後期には山麓部から丘陵部を中心に、横穴式石室を主体とする青松塚古墳、南塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳等の単独墳が築造される一方で、安威古墳群、将軍山古墳群、新屋古墳群等の群集墳が認められる。また、丘陵部から沖積平野部を中心とした太田遺跡、総持寺遺跡、中条小学校遺跡、郡遺跡等の遺跡において埋没古墳群の存在が明らかとなっている。このほか、古墳時代の集落遺跡としては、東奈良遺跡、中条小学校遺跡、春日遺跡、倍賀遺跡、郡遺跡、安威遺跡、総持寺遺跡等が代表的な遺跡として挙げられる。安威遺跡からは朝鮮半島南部由来の遺物・遺構が多く出土しており、本市域における古墳時代集落の動態を考える上で極めて重要である。

古代 奈良時代に入ると、茨木市域は摂津国島下郡に編成される。平城遷都にともない、島下郡には「殖村駅」が置かれ、茨木市域は宮都から難波や山陽・西海道諸国への公的な通路となる。7世紀後半ごろには太田廃寺・穂積廃寺・三宅廃寺等の寺院が建立され、太田廃寺からは、塔心礎とその内部に納められた舍利容器一具等が発見された。9世紀以降においても、総持寺や忍頂寺をはじめとする寺院が市域各地に建立される。また、いわゆる延喜式神名帳には島下郡に 13 社もの神社が規定されており、そのうち 10 社が現在の茨木市域に所在した。都から大宰府へと向かう山陽道、難波方面へと向かう三島路が交わる地点にある茨木市域は、政治・文化・交通の要所であったといえる。

中世～近世 中世の遺跡としては、郡遺跡、東奈良遺跡、宿久庄遺跡、玉櫛遺跡、真砂遺跡等の集落遺跡が代表的な遺跡として挙げられる。一方、中世から近世初頭の遺跡には、茨木城、三宅城、福井城、泉原城、佐保峯などの城館跡がある。市域中心部に位置する茨木城は、城主の変遷によりその内容や規模も変化すると考えられるが、一国一城令により廃城になった後も、その周辺の水路や地割等は現在まで影響している。しかしながら、茨木城や廃城後の近世在郷町の実態はなお不明な点が多く、限定的ながらも発掘調査によって得られる知見は、その解明に向けてとりわけ重要である。このほか、国史跡に指定されている西国街道沿いに位置する郡山宿本陣は「椿の本陣」とも呼ばれ、江戸時代には西国大名たちの参勤交代にも利用された。また、市域北部の集落である千提寺・下音羽は、「聖フランシスコ・ザビエル像」をはじめとするキリシタン遺物がまとまって発見された地として著名であり、高山右近の所領の時期にキリシタン信仰がもたらされたと考えられている。禁教令下の江戸時代を通じて密かに受け継がれてきたため、その存在が明らかになるのは 20 世紀に入ってからである。本市で継続的に調査を進めてきた千提寺菱ヶ谷遺跡や新名神高速道路建設工事に伴う一連の発掘調査およびキリシタン遺物等の研究成果をもとに、この地のキリシタン信仰への理解がさらに進むことが期待される。

〔引用文献〕

木庭元晴 2012 「基盤地質」『新修茨木市史』 第一巻通史 I 茨木市

〔参考文献〕

茨木市史編さん委員会 2012 『新修 茨木市史』 第一巻通史 I 茨木市

茨木市史編さん委員会 2014 『新修 茨木市史』 第七巻史料編考古 茨木市

茨木市教育委員会 1998 『茨木の史跡』

茨木市教育委員会 2005 『郡遺跡発掘調査概要報告書』

公益財団法人大阪府文化財センター 2015 『千提寺西遺跡 日奈戸遺跡 千提寺市阪遺跡 千提寺クルス山遺跡』

第2章 令和3年度調査地一覧

※a～cは、令和3年1月～3月（令和2年度）に実施したものである。

No.	遺跡名	調査地	調査期間	面積	担当者	内容
a	茨木遺跡2020-7	新庄町	2021/1/12	6㎡	木村	土師器・瓦器・磁器片が出土。
b	茨木遺跡2020-8	新庄町	2021/1/13	6㎡	木村	土坑3基・ピット1基を検出。土師器・瓦器・陶器片が出土。
c	溝昨遺跡2020-1	五十鈴町	2021/3/29 ～ 2021/3/30	9㎡	富田	土師器・瓦器片が出土。
1	茨木遺跡2021-1	宮元町	2021/4/5	4㎡	木村	遺構・遺物なし。
2	牟礼東遺跡2021-1	寺田町	2021/4/8	5㎡	富田	土師器・須恵器・瓦器片が出土。
3	沢良宜城跡2021-1	美沢町	2021/4/12	4㎡	正岡	遺構・遺物なし。
4	駅前遺跡2021-1	駅前四丁目	2021/5/25	6㎡	木村	溝1条・ピット1基を検出。土師器片が出土。
5	総持寺遺跡2021-1	総持寺一丁目	2021/4/20 ～ 2021/5/31	136㎡	高村	総柱建物を含む建物を2棟以上検出。溝2条・土坑2基・ピット76基を検出。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器片が出土。
6	総持寺遺跡2021-2	三島丘一丁目	2021/6/2	5.52㎡	富田	遺構・遺物なし。
7	茨木遺跡2021-2	大手町	2021/7/13	5㎡	木村	溝1条を検出。土師器・須恵器・瓦・陶器片が出土。
8	春日遺跡2021-2	上穂東町	2021/7/15	5㎡	木村	ピット9基を検出。土師器・瓦器・瓦質土器片が出土。
9	郡山遺跡2021-1	郡三丁目	2021/9/7	4㎡	正岡	溝1条・土坑1基を検出。土師器・須恵器・瓦器片が出土。
10	駅前遺跡2021-2	駅前四丁目	2021/10/27	6㎡	正岡	土坑1基・ピット1基を検出。
11	郡山遺跡2021-2	郡三丁目	2021/11/1	3.6㎡	木村	落ち込み1基を検出。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器片が出土。
12	中条小学校遺跡2021-2	下中条町	2021/12/16	6㎡	木村	土坑1基を検出。土師器片が出土。

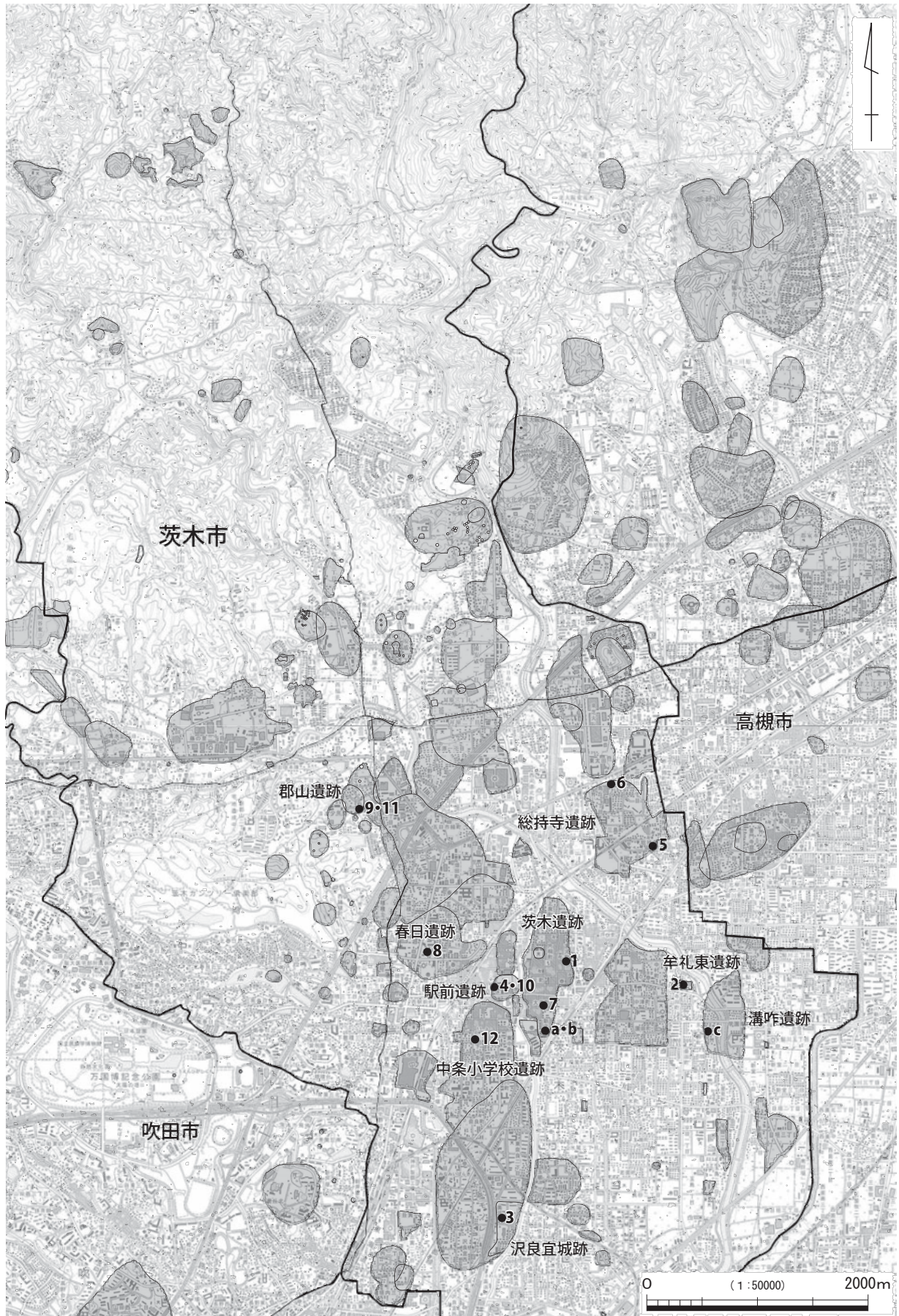


図2 令和3年度発掘調査地位置図 (アルファベット・アラビア数字は前頁 No. と対応する)

第3章 調査の成果

第1節 茨木遺跡

1. 茨木遺跡 2020-7 (図3～5 図版1)

調査地 茨木市新庄町1748番

調査面積 6㎡

調査期間 令和3年1月12日

調査担当 木村健明

はじめに 新庄町において計画された個人住宅の建築に伴い、計画地内に2×3mの調査区を設定して調査を行った。計画地内の現況地盤面は東接する南北道路面より0.3m程度低い。

基本層序 調査地の基本層序は大別7層、細別10層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a層)、1層：時期不明の層準(1-1a層)、2層：時期不明の層準(2-1a・2-2a層)、3層：時期不明の層準(3-1a層)、4層：中世以後の層準(4-1a層)、5層：中世の遺物を含む土壌層ないし水成層(5-1a層)、

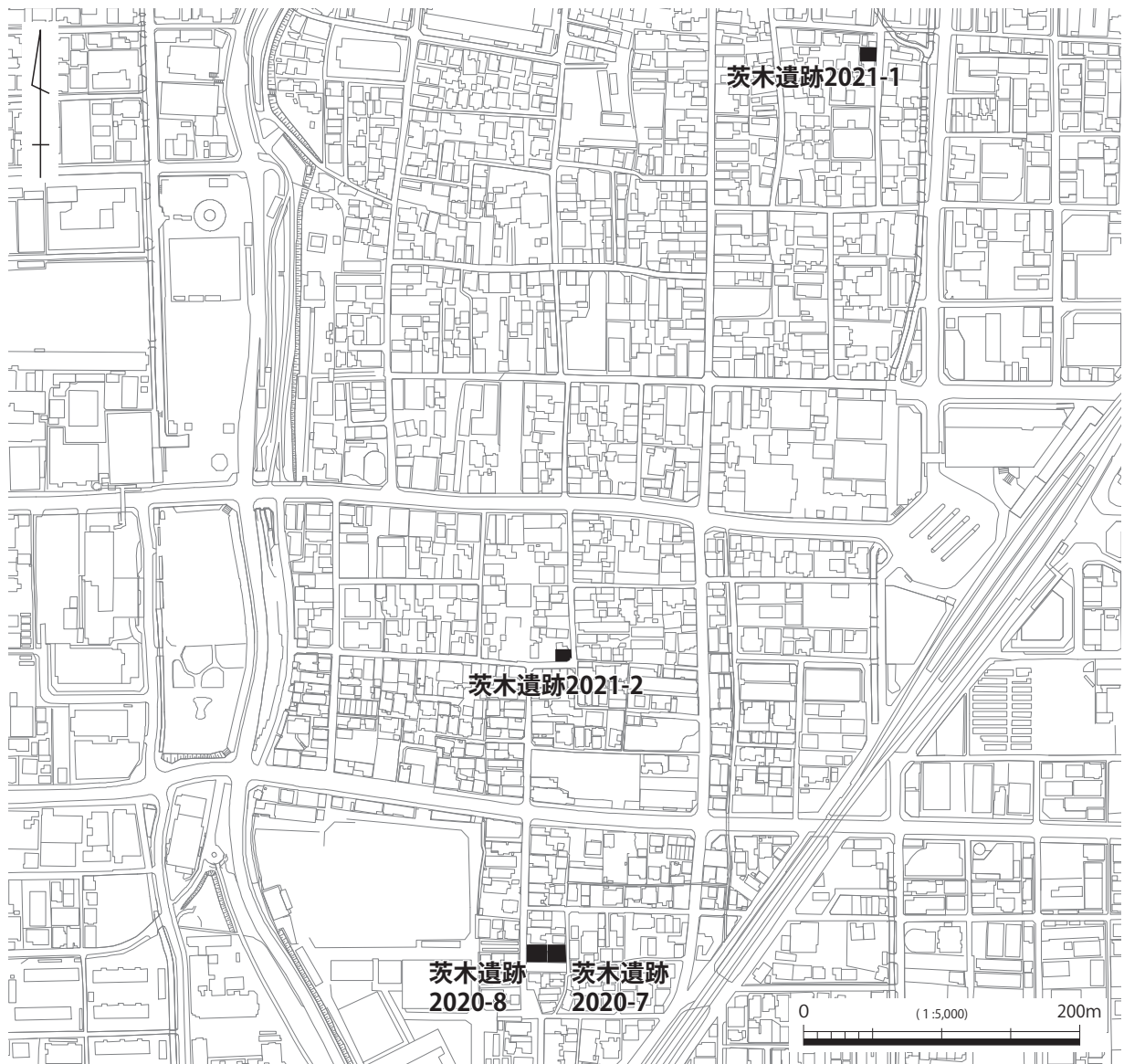


図3 茨木遺跡調査地位置図

第3章 調査の成果

6層：斜行葉理が顕著に認められる水成層（6-1b～6-3b層）の順に堆積が認められた。1-1a～4-1a層は粗砂を主体とする粘質シルト混じりの層準である。層相からは盛土の可能性はあるが詳細は明らかにし得なかった。

遺構・遺物 調査では、層界が明瞭に認められる2-2a層下面及び5-1a層下面の2面について平面的な調査を実施したが、遺構は検出できなかった。

遺物は5-1a層から中世の土器が細片を中心に少量出土している。このうち図示可能なものを図5に掲げた（1～6）。1・2は土師器皿である。ともに一段ナデを施す小型の皿で、2は口径9cm、器高2.1cmを測る。京VII期に位置づけられようか。3～5は瓦器碗である。いずれも細片のため詳細は不明だが、内外面のヘラミガキの様相等を勘案すると、3・4は和泉型Ⅱ～Ⅲ期、5は楠葉型Ⅱ期に帰属するとみられ、ともに12世紀後半に位置づけられる。6は白磁碗の体部片である。破片を主体とするため詳細は決し難いが、当該層準に含まれる遺物は概ね12世紀後半～13世紀前半に帰属するものと判断できる。

まとめ 今回の調査地の北側に隣接する茨木遺跡 2018-2（茨木市教育委員会 2019）及び後述する茨木遺跡 2020-8では、現況地盤面から約1mの深度で遺構を確認している。本調査区では遺構は確認し得なかったが、地層の確認に加え、細片ながらも遺物が出土したことで、各地層の時期比定に関して新たな知見を加えることができた点で重要な成果を得ることができた。

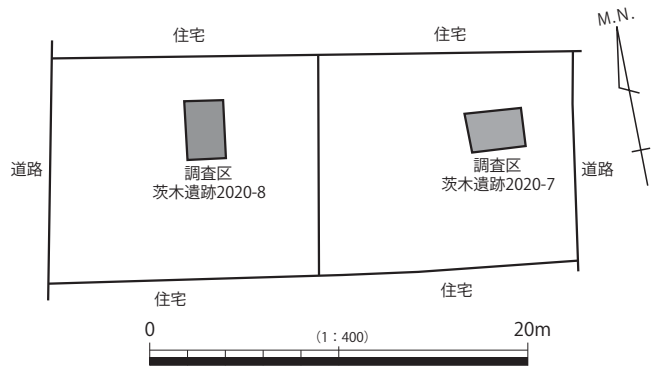
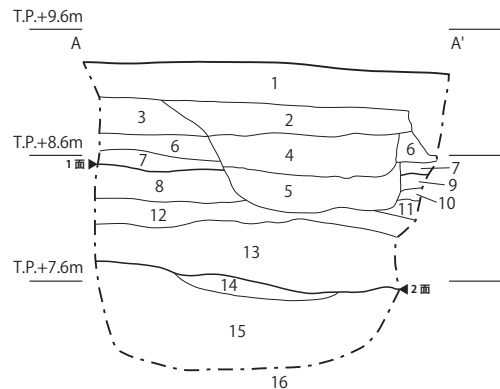
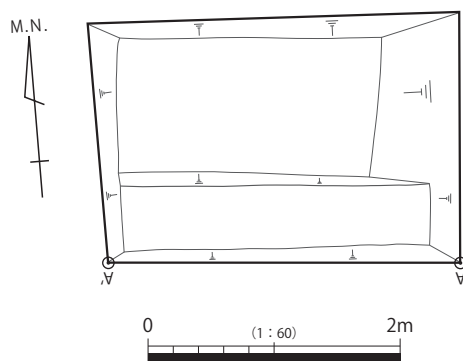


図4 調査区配置図（茨木遺跡 2020-7・2020-8）



- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1 [0-1a層] (盛土層) | 9 2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり粘質シルト |
| 2 2.5Y8/2 灰白色粗砂と2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂が混じる | 10 2.5Y6/1 黄灰 粘質シルト |
| 3 2.5Y6/2 灰黄 粗砂 [1-1a層] | 11 5Y7/2 灰白 粗砂混じり粘質シルト |
| 4 2.5Y8/2 灰白 粗砂 (鉄分沈着) | 12 2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり粘質シルト [4-1a層] |
| 5 5Y7/1 灰白色粘土と2.5Y8/2 灰白色粗砂が混じる | 13 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり粘質シルト [5-1a層] [包含層] |
| 6 2.5Y6/2 灰黄 粗砂混じり粘質シルト [2-1a層] | 14 2.5Y8/1 灰白 微砂 [6-1b層] |
| 7 5Y7/1 灰白 粗砂混じり粘質シルト (鉄分沈着) [2-2a層] | 15 5Y8/1 灰白 粗砂 (鉄分沈着) [6-2b層] |
| 8 2.5Y6/2 灰黄 粗砂混じり粘質シルト [3-1a層] | 16 2.5Y7/3 浅黄 粗砂 (鉄分沈着) [6-3b層] |

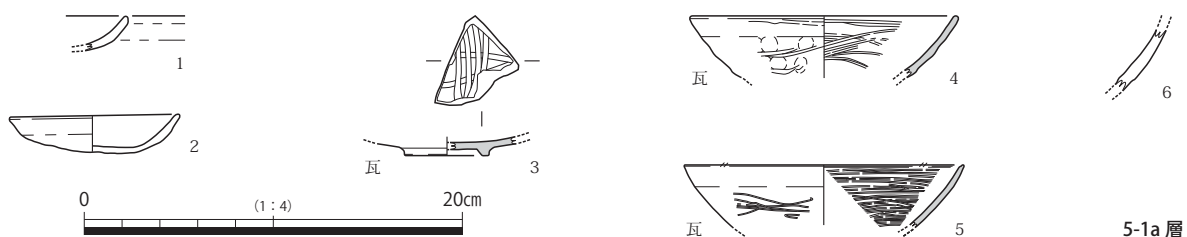


図5 平・断面図・出土遺物（茨木遺跡 2020-7）

2. 茨木遺跡 2020-8 (図3・4・6・7 図版1)

調査地 新庄町1748番

調査面積 6㎡

調査期間 令和3年1月13日

調査担当 木村健明

はじめに 新庄町において計画された個人住宅の建築に伴い、3×2mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西接する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別6層、細別12層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a層)、1層：時期不明の耕作土層(1-1a～1-3a層)、2層：時期不明の層準(2-1a層)、3層：時期不明の層準(3-1a層)、4層：中世以後に形成された可能性のある水成層(4-1b～4-4b層)、5層：粗砂を主体とする水成層(5-1b・5-2b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査では、層界の明瞭な2-1a層下面において遺構を確認した。検出した遺構は土坑3基、ピット1基である。いずれも起源不明の埋土で充填される不整形な土坑である。

遺物は、4-3b層中から土師器・瓦器・陶器が細片を中心として出土し、このうち図示可能なものを図7に掲げた(7・8)。7・8は瓦器碗である。内面のヘラミガキはやや密で外面のヘラミガキが一部残存することから、和泉型Ⅱ～Ⅲ期に帰属すると考えられ、12世紀後半に位置づけられる。このほか、2・3土坑から土師器・瓦器碗片が出土したが、微細な破片のため図示し得なかった。概ね12世紀代の所産とみられるが、遺構の帰属時期を示すものかどうかも含めて詳細は明らかにし難い。

まとめ 本調査区で確認した5-2b層は、粗砂を主体とするやや淘汰の悪い水成層である。層相の比較から先に述べた茨木遺跡2020-7調査区の6-1b～6-3b層に比定可能な層準とみられる。また、同様に4-3b層は層相及び出土遺物の内容から茨木遺跡2020-7調査区の5-1a層に比定できる可能性がある。遺構の帰属時期は明確にはし得なかったが、地層の確認に加え細片ながらも遺物が出土したことで、

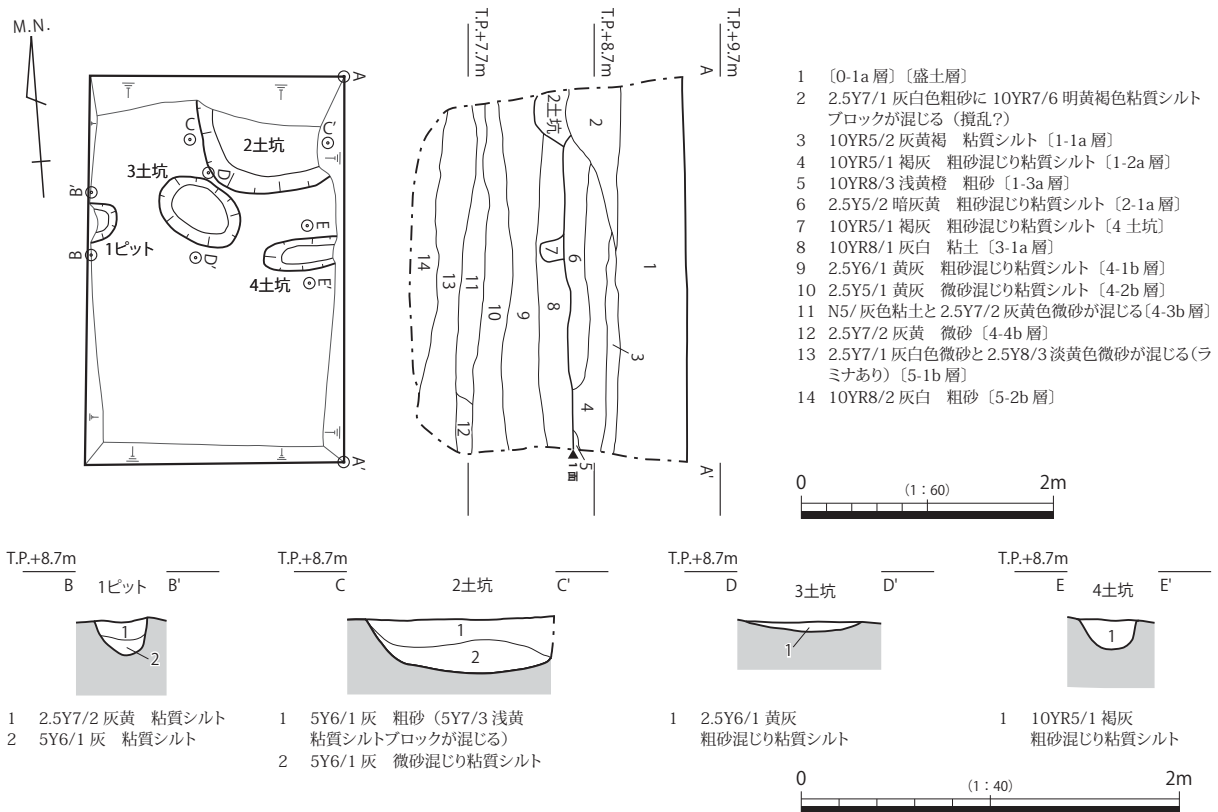


図6 平・断面図(茨木遺跡2020-8)

第3章 調査の成果

各地層の時期比定に関して新たな知見を加えることができた点は大きな成果といえる。

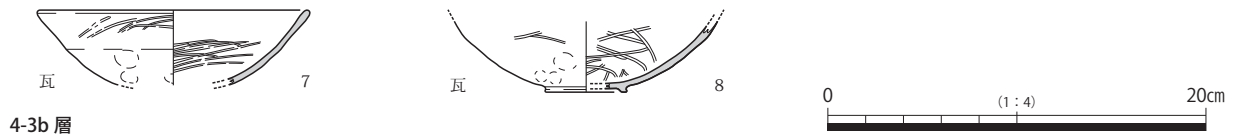


図7 出土遺物（茨木遺跡 2020-8）

3. 茨木遺跡 2021-1（図3・8・9 図版2）

調査地 宮元町1334番3

調査面積 4m²

調査期間 令和3年4月5日

調査担当 木村健明

はじめに 宮元町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×2 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する南北道路面とほぼ同じで、調査地内は概ね平坦である。

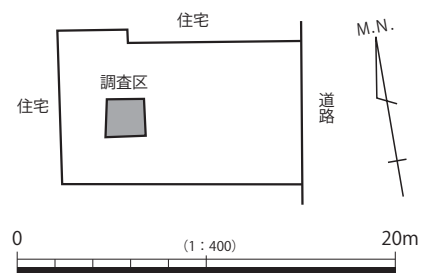


図8 調査区配置図
（茨木遺跡 2021-1）

基本層序 調査地の基本層序は大別3層、細別4層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：時期不明の水成層（1-1b層）、2層：時期不明の水成層（2-1b・2-2b層）の順に堆積が認められた。2層は、暗色味を帯びた粘性の強い層準であり、植物遺体を含んでいることから堆積速度の緩慢な環境で形成された水成堆積物とみられる。

遺構・遺物 いずれの層界及び層準からも遺構・遺物は確認できなかった。

まとめ 今回の調査で確認した1層以下の各層準は、いずれも河川性の氾濫堆積物とみられる。今回は本層準が厚く、調査地も狭小であったため下位層の確認は成し得なかった。下位に位置する層準の様相把握は今後の課題である。

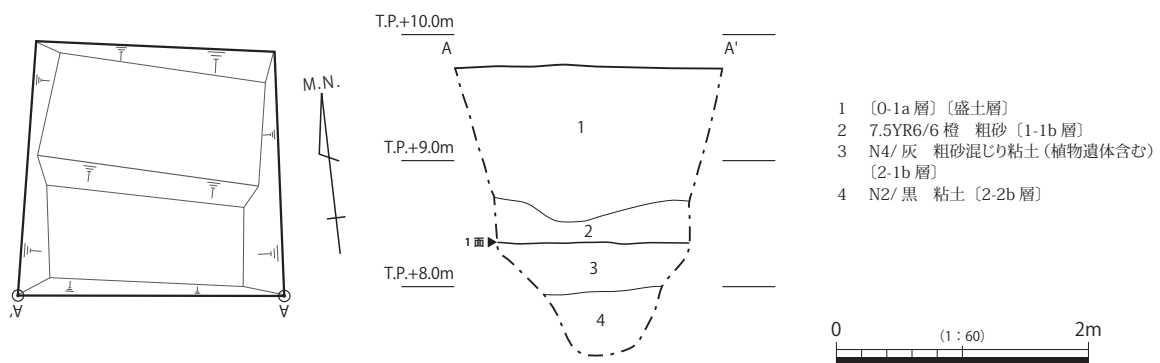


図9 平・断面図（茨木遺跡 2021-1）

4. 茨木遺跡 2021-2（図3・10 図版2）

調査地 大手町1714番3

調査面積 5m²

調査期間 令和3年7月13日

調査担当 木村健明

はじめに 大手町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×2.5 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東・南面する道路面とほぼ同じで、調査地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別5層、細別6層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、

1層：近世の整地層とみられる層準（1-1a層）、2層：中世に形成されたと目される層準（2-1a層）、3層：古代～中世に形成されたと目される層準（3-1a・3-2a層）、4層：古代以前の水成層（4-1b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 3層下面で遺構検出を行った結果、東西方向の溝の北側掘方付近を検出した。調査区全体が溝内部に該当するため平面的な規模は明らかでないが、検出面からの深さは約0.4mを測る。

遺物は1・2層・1溝から出土しており、図示可能なものを図10に掲げた（9～15）。9は1層から出土した近世の備前焼摺鉢である。10は2層から出土した土師器小皿である。口径10.4cm、器高1.8cmと浅身であり、底部内面の圈線はやや鈍く小ぶりの底部はやや上げ底状を呈する。色調は乳白色～淡褐色を呈する。京X～XI期前後に帰属するものとみられ、概ね15～16世紀代の所産と考えられようか。11～15は1溝から出土した土師器・須恵器である。11は土師器高杯の脚部片である。12・13は土師器皿ないし杯の口縁部片である。13は口縁端部を短くつまみ出し、丸く収める。14は須恵器の杯ないし壺の底部片である。15は須恵器の杯蓋片である。細片が多いため個々の詳細な帰属時期は明らかにし難いが、15を除けばいずれも古代の範疇で捉えることができるとみられ、1溝の埋没時期を示すものと考えられる。

まとめ 本調査区では、限られた面積ながら遺構・遺物を確認することができた。周辺の既往調査では奈良時代の遺構・遺物は確認されておらず、新たな知見を加えることができた。

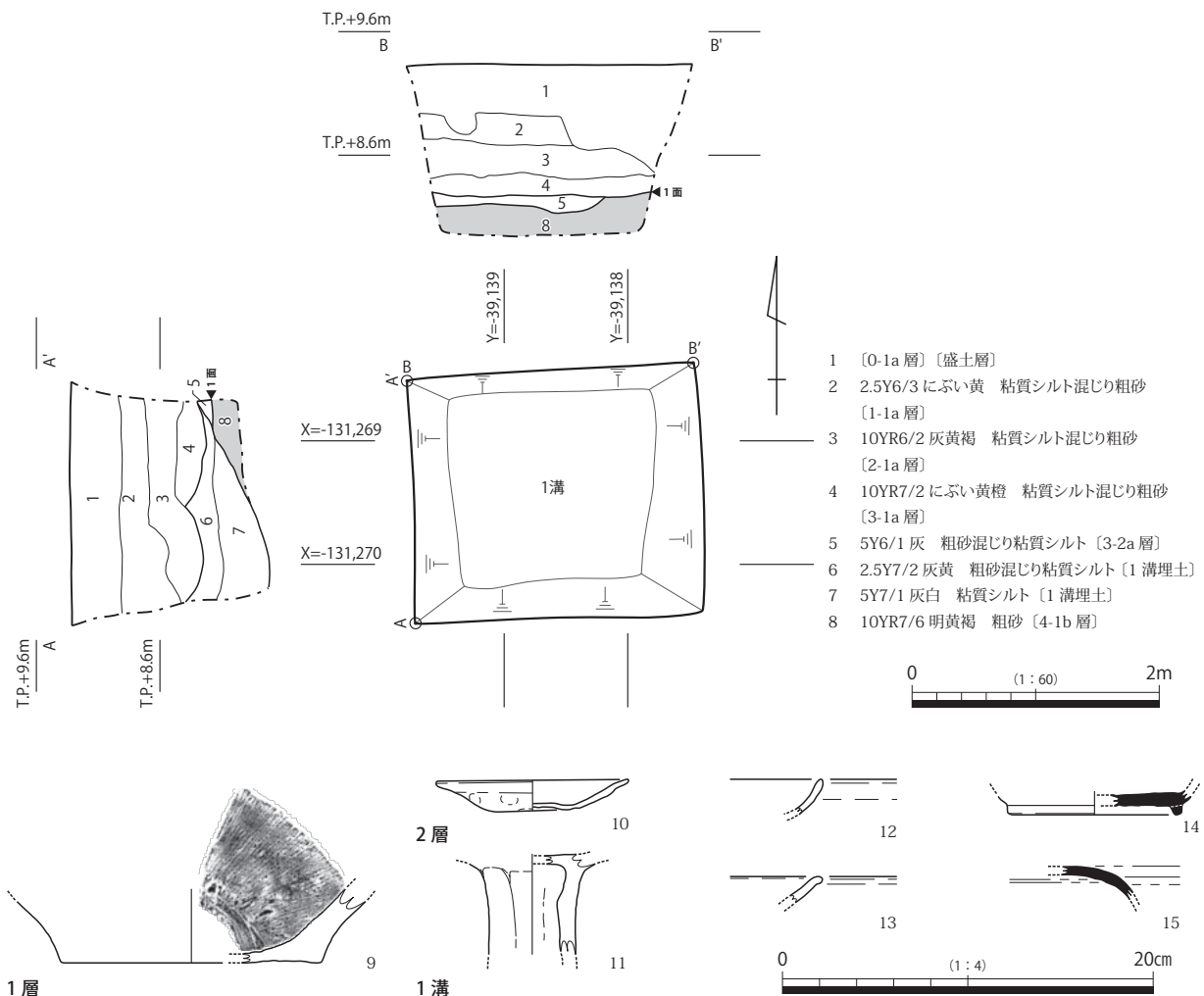


図10 平・断面図・出土遺物（茨木遺跡 2021-2）

第2節 駅前遺跡・春日遺跡

1. 駅前遺跡 2021-1 (図11・12 図版3)

調査地 駅前四丁目115番13

調査面積 6㎡

調査期間 令和3年5月25日

調査担当 木村健明

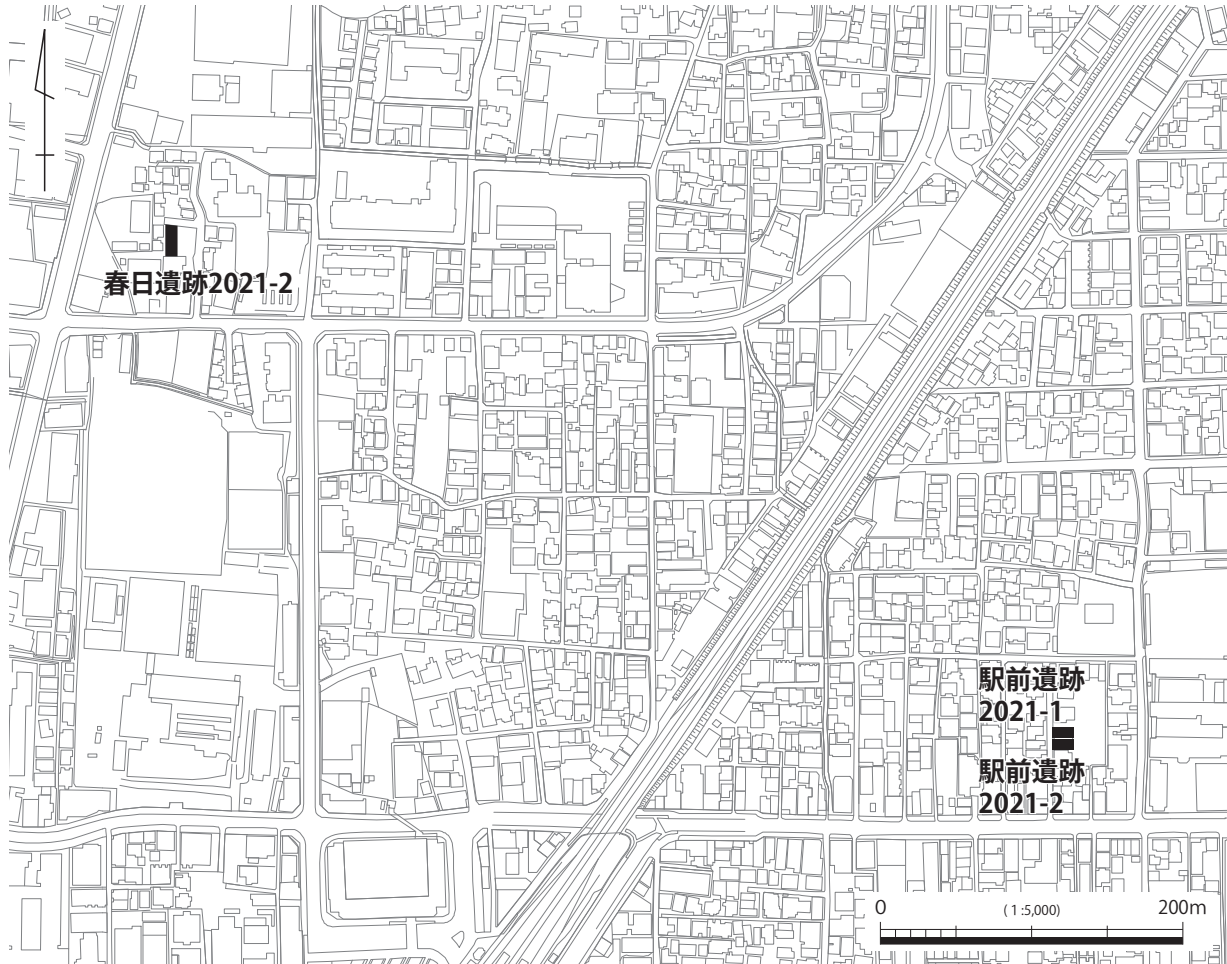


図11 駅前遺跡・春日遺跡調査地位置図

はじめに 駅前四丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は5層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a層)、1層：近～現代耕作土層(1-1a層)、2層：中～近世に形成されたと目される耕作土層(2-1a層)、3層：土師器片を含む耕作土層と目される層準(3-1a層)、4層：ベース層を形成する淘汰の良い水成層(4-1b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査の結果、3層下面において溝1条(2溝)、ピット1基(1ピット)を検出した。2溝は幅0.4m、検出面からの深さ約3cmを測り、南西―北東方向に軸を有する直線的な溝である。1ピットは長径0.35m、短径0.2m、検出面からの深さ4cmを測る。いずれも3層に近似した土壌を埋土としており、下面遺構として捉えられる。

遺物は3-1a層から土師器片が出土したが、微細な破片のため図示し得えず、帰属時期の特定も決しがたい。

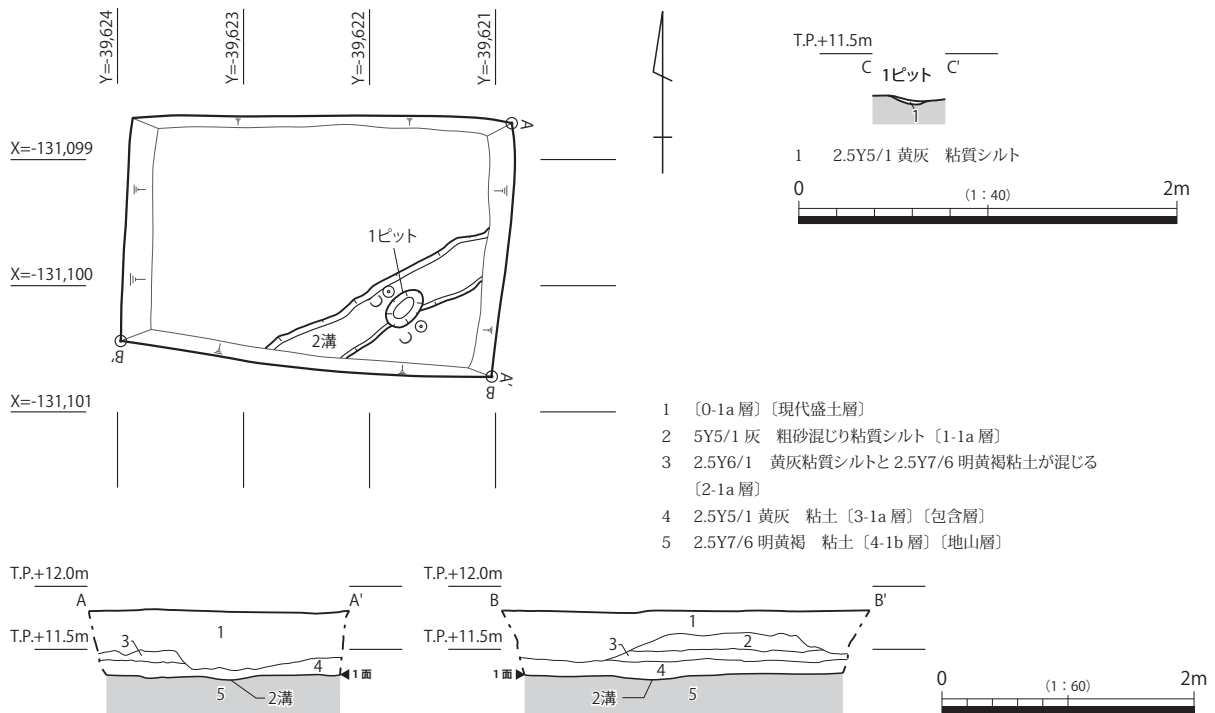


図 12 平・断面図（駅前遺跡 2021-1）

まとめ 出土遺物が細片のため遺構の詳細な帰属時期は不明であるが、遺物を包含する層とその下面において遺構が良好に遺存することを確認した。周辺では調査事例が僅少であることから、断片的な成果ではあるものの、重要な知見を加えることができた。

2. 駅前遺跡 2021-2 (図 11・13 図版 4)

調査地 駅前四丁目115番33

調査面積 6㎡

調査期間 令和3年10月27日

調査担当 正岡大実

はじめに 駅前四丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は、大別5層、細別8層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・現代耕作土層（0-1a・0-2a層）、1層：近世耕作土層（1-1a層）、2層：中世に形成されたと目される耕作土層（2-1a層）、3層：中世以前に形成された可能性のある耕作土層（3-1a・3-2a層）、4層：淘汰の良い水成層（4-1b・4-2b層）の順に堆積が認められた。なお、遺物が認められなかったため、地層の時期は層相からの推定に留まる。

遺構・遺物 調査では、3層下面において土坑1基、ピット1基を検出した。2土坑は長径約0.6m、短径約0.35mの長楕円形の土坑で、検出面からの深さは14cmを測る。1ピットは直径0.14mの小ぶりな正円形を示し、検出面からの深さは7cmを測る。いずれも前項の駅前遺跡2021-1同様、3層に近似した土壌を埋土としており、下面遺構として捉えることができる。

遺物は出土しておらず、各地層及び遺構の帰属時期の詳細は不明である。

まとめ 出土遺物が認められなかったため、遺構や地層の詳細な帰属時期は不明ではあるが、駅前遺跡2021-1同様の成果を得ることができた。周辺では調査事例が少ないため断片的な成果ではあるが、重要な知見を加えることができたものといえよう。

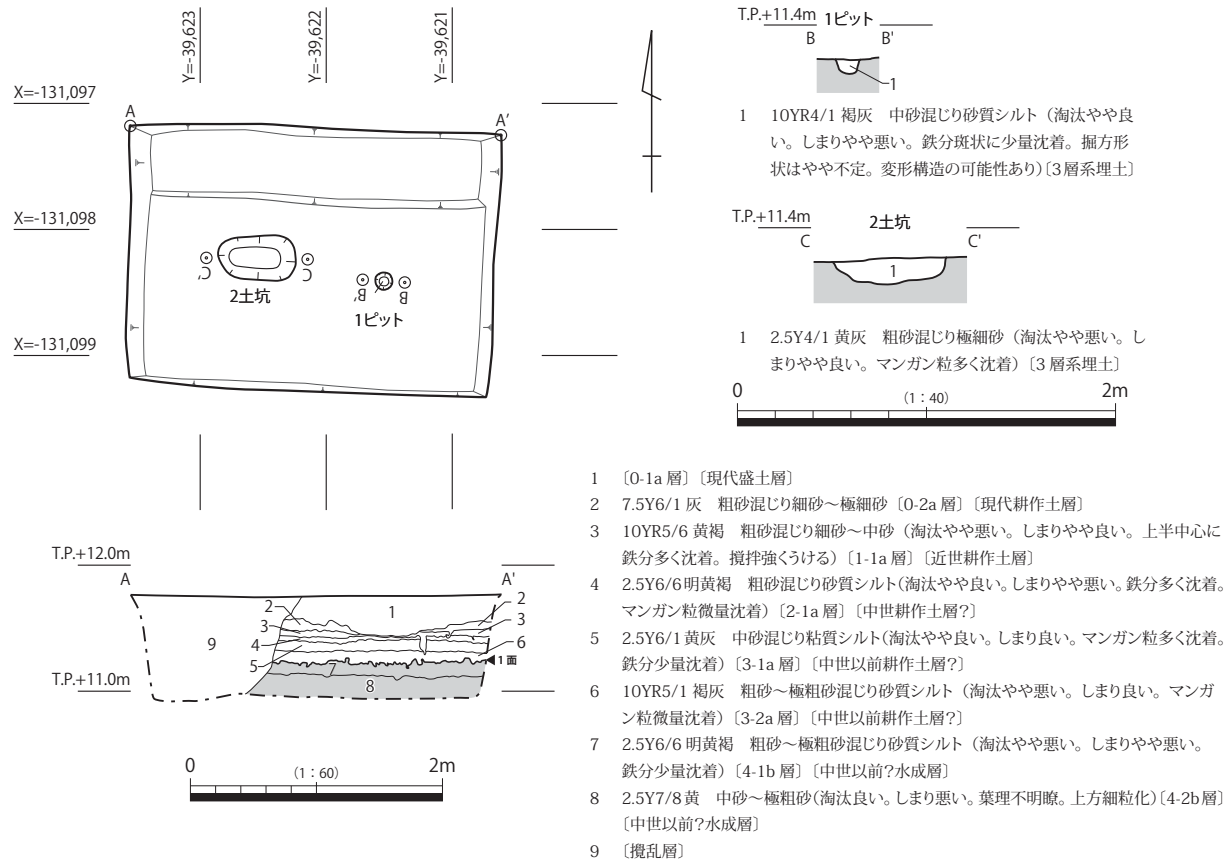


図13 平・断面図 (駅前遺跡 2021-2)

3. 春日遺跡 2021-2 (図11・14 図版5)

調査地 上穂東町134番1

調査面積 5㎡

調査期間 令和3年7月15日

調査担当 木村健明

はじめに 上穂東町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×2.5mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は北面する東西道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は4層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a層)、1層：時期不明の耕作土層(1-1a層)、2層：遺物を含む土壌層(2-1a層)、3層：ベース土層(3-1b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 2層下面でピット9基を検出した。これらのピットは直径0.2～0.5mの円形を呈し、検出面からの深さは浅いもので5～10cm、深いもので25～50cmを測る。いずれも2層よりはやや黒色味の強い土壌を埋土としており、基底面遺構として捉えるべき遺構と考えられる。なお、ピットのうち3基(1・2・5ピット)には柱痕が認められた。調査面積が限られるため詳細は明らかでないが、建物の存在が示唆される。このほか、5ピットの坑底付近からは後述する羽釜が半個体分出土した。

遺物は2-1a層から土師器・瓦器の細片が出土したほか、4～6ピットから土師器・瓦質土器が出土した。このうち、図示可能なものを図14に掲げた(16・17)。16は5ピットから出土した羽釜である。焼成が甘く土師質に近い様相を呈するが、瓦質土器とみられる。17は6ピットから出土した土師器小皿である。細片のため全容を窺うことができない上に口径も復元し得なかったが、いわゆるへそ皿とみられる。京Ⅷ～Ⅸ期に帰属するものか。いずれも14世紀代の所産とみられる。

第3節 総持寺遺跡

1. 総持寺遺跡 2021-1 (図 15～21 図版 6～8)

調査地 総持寺一丁目697番

調査面積 約136㎡

調査期間 令和3年4月20日～5月31日

調査担当 高村勇士

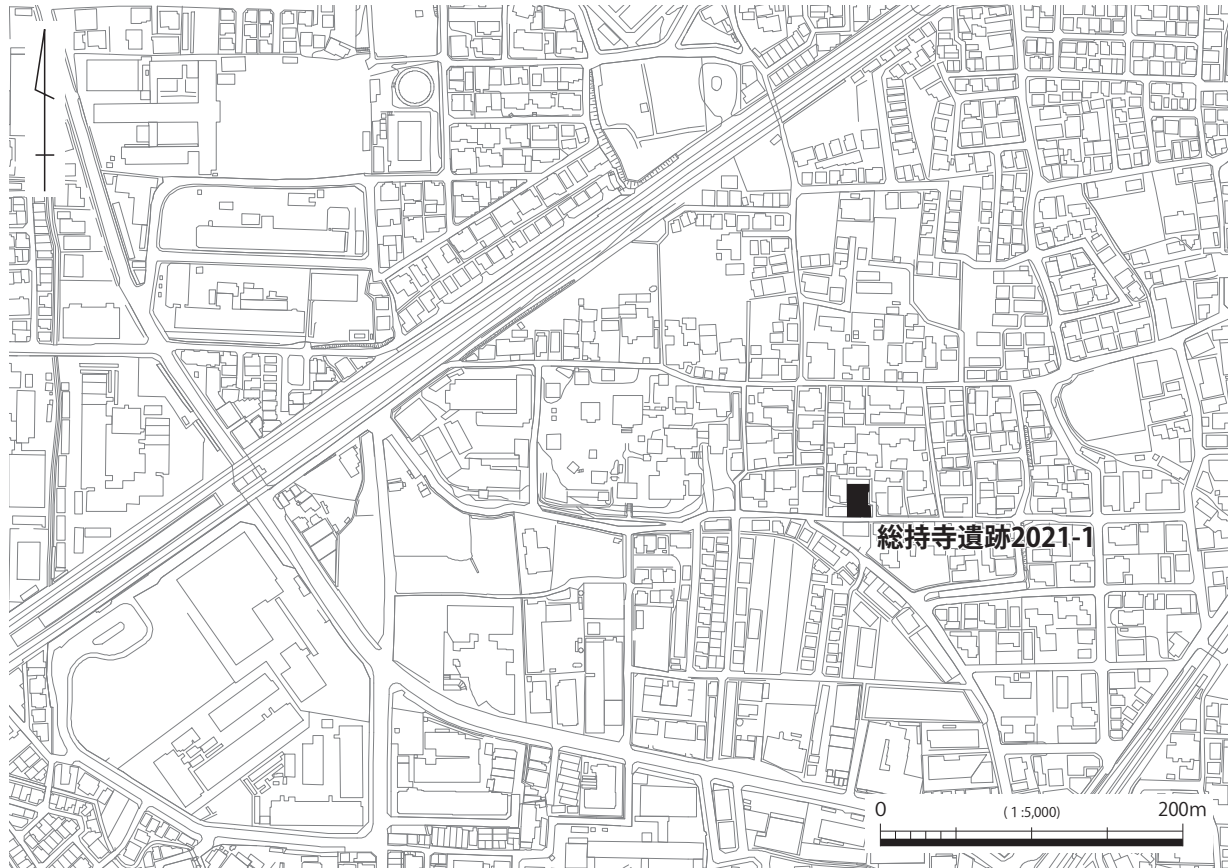


図 15 総持寺遺跡調査地位置図 (1)

はじめに 総持寺一丁目において計画された兼用住宅の建築に伴い、合計 19.6㎡のトレンチを設定し、確認調査を実施したところ弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。この結果を受けて事業主と協議し、日を改めて 8 m × 17 m の調査区を設定し調査を行った。調査地の現況地盤面は、南接する東西道路面よりやや高いが、従前建物の基礎解体により概ね平坦に整地されていた。なお、調査地の一部は包蔵地外であったため、文化財保護法第 96 条第 1 項に基づく「発見の届出」の提出を経て総持寺遺跡の範囲が拡大された。

調査地は総持寺遺跡の大半が乗る低位段丘の南端にあたり、調査地南側は程なく段丘崖を大きく下る。総持寺北遺跡を含めて総持寺遺跡北部の低位段丘上の地は、弥生時代から中世の遺構・遺物が稠密に出土し（(財)大阪府文化財センター 2004、大阪府教育委員会 2007）、とりわけ奈良時代には「在地豪族層配下にあった下級役人等の性格を持つ有力者を一部に含む集団の構成員」が居住していたと想定されている（(財)大阪府文化財調査研究センター 1998）。一方、調査地以南・以西の段丘崖下に落ちた地点では、弥生時代後期から古墳時代の遺構・遺物が確認されるものの、古代から中世にかけては耕作地であったことが報告されており（茨木市教育委員会 2012、(公財)大阪府文化財センター 2014・2017）、平安時代以前には段丘崖下に沿って安威川の旧河道を想定する説もある（(公財)大阪府文化

財センター 2014)。また、調査地の西には 9 世紀後半に藤原山陰によって創建された総持寺がその名とともに伽藍を残しており、創建当初の立地を現在に継承しているとするならば、9 世紀後半以降、調査地は総持寺の影響を強く受けたと想定される。

調査は、掘削残土の置き場を調査地内に確保するため、調査区を北から A、B、C の 3 区に分割し調査を実施した。また、残土運搬の都合から A 区、C 区、B 区の順に行い、足場写真は各調査区の東側より 2 段の足場を組んで撮影した。

基本層序 調査地の基本層序は大別 2 層、細別 4 層に区分でき、上層から 0 層：従前建物の解体後の整地土 (0-1a・0-2a 層)、1 層：弥生時代以前に形成された水成層及び低位段丘層 (1-1b 層・1-2b 層) の順に堆積が認められた。

遺構 確認調査の結果に基づき 1 層上面で平面的な調査を実施した。ただし、1 層上面は、従前建物解体を主たる原因として、部分的に重機等による掘削が及び、その掘削深度は区々であった。遺構検出はその制約を大きく受け、すべてが同一レベルで検出できていないわけではない。遺構はピット 76 基、不明土坑 2 基、溝 2 条を確認した。検出した遺構の大部分をピットが占める。ピットは平面形状により概ね 2 種に分けられ、①径 50cm 程度の隅丸方形を呈するものと、②不定形であるが径 20cm から 30cm 程度の円形を呈するものがある。すべてのピットを解釈するのは難しいが、①については 2 棟の掘立柱建物が想定できる。②については、個別のピットに柱痕跡が認められるものもあるが建物復原には至らない。ただし、②ピット内からは瓦器碗や土師器の細片などが出土しており、中世以降のピットが一定程度含まれると考えられる。以下、個別の遺構ごとに報告する。

掘立柱建物 2 調査区中央で検出した。北西角と南西角はこれまでの攪乱を受けているため柱穴痕跡が確認できず、その他のピットについても掘方すべてを確認できないものが多く、推測に頼る部分も多いが、①のピットで構成される 3 間×3 間の総柱建物が想定できる。柱間は 1.5 m から 1.7 m を測り、建物主軸は北から東へ 5°～6°振る。ピットの平面規模は側柱と屋内柱に大きな差はない。側柱の柱堀方中心に囲まれる面積は約 21.5㎡である。

掘立柱建物 2 を構成するピットについては、平面規模が約 60cm×70cm の概ね東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、その主軸は北からやや東へ振り建物主軸と概ね揃うものがある (46 ピット・76 ピットなど)。ピットの断面形状は、壁面は比較的垂直に落ちるものの、下部から最下部にかけてやや丸みを帯びる。したがって、同一建物を構成すると考えたピットであっても、最下部のみ遺存しているものについては、検出した平面形状は必ずしも隅丸方形ではない。また、柱の痕跡については、柱の当たりを含めて明瞭に確認できないものが多いものの、46 ピット掘方中央で確認されたピット状の痕跡がそれに該当する可能性がある。ただし、柱根は確認できず、すり鉢状の断面形態とその埋土にブロック土が多いことから、柱抜き取り穴の可能性が高いが、依然として後世の遺構の可能性を残す。また、43 ピットには、下部に径 20cm から 30cm の扁平な礫が多く見られた。柱を据える際の根石や礎石の機能を目的とした可能性はあるものの、柱位置が不明であることや、同一建物を構成するとみられる他のピットには認められないこと、低位段丘層の比較的強固な地盤をベースとすることなどを勘案するとその可能性は低いと思われる。

掘立柱建物 2 を構成する 45 ピットより、弥生土器壺若しくは甕の底部片、須恵器甕の体部片が出土した。須恵器甕の体部片は、内外面灰色、断面赤褐色を呈し、外面には格子状のタタキ目が認められるが、その他大きな特徴は見えず、古墳時代から古代という広い範疇で捉えるしかないであろう。この他

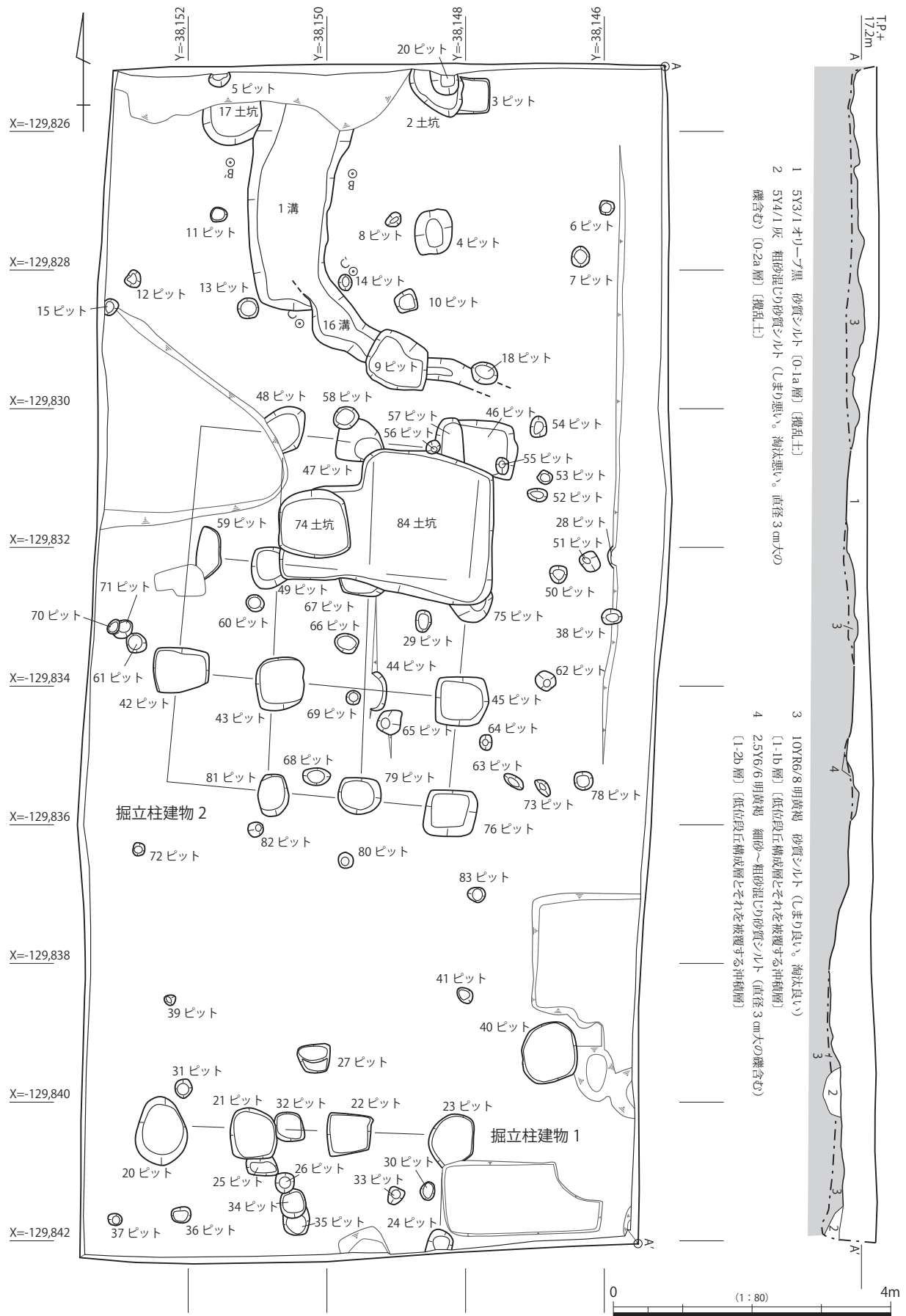


図16 平・断面図 (総持寺遺跡 2021-1)

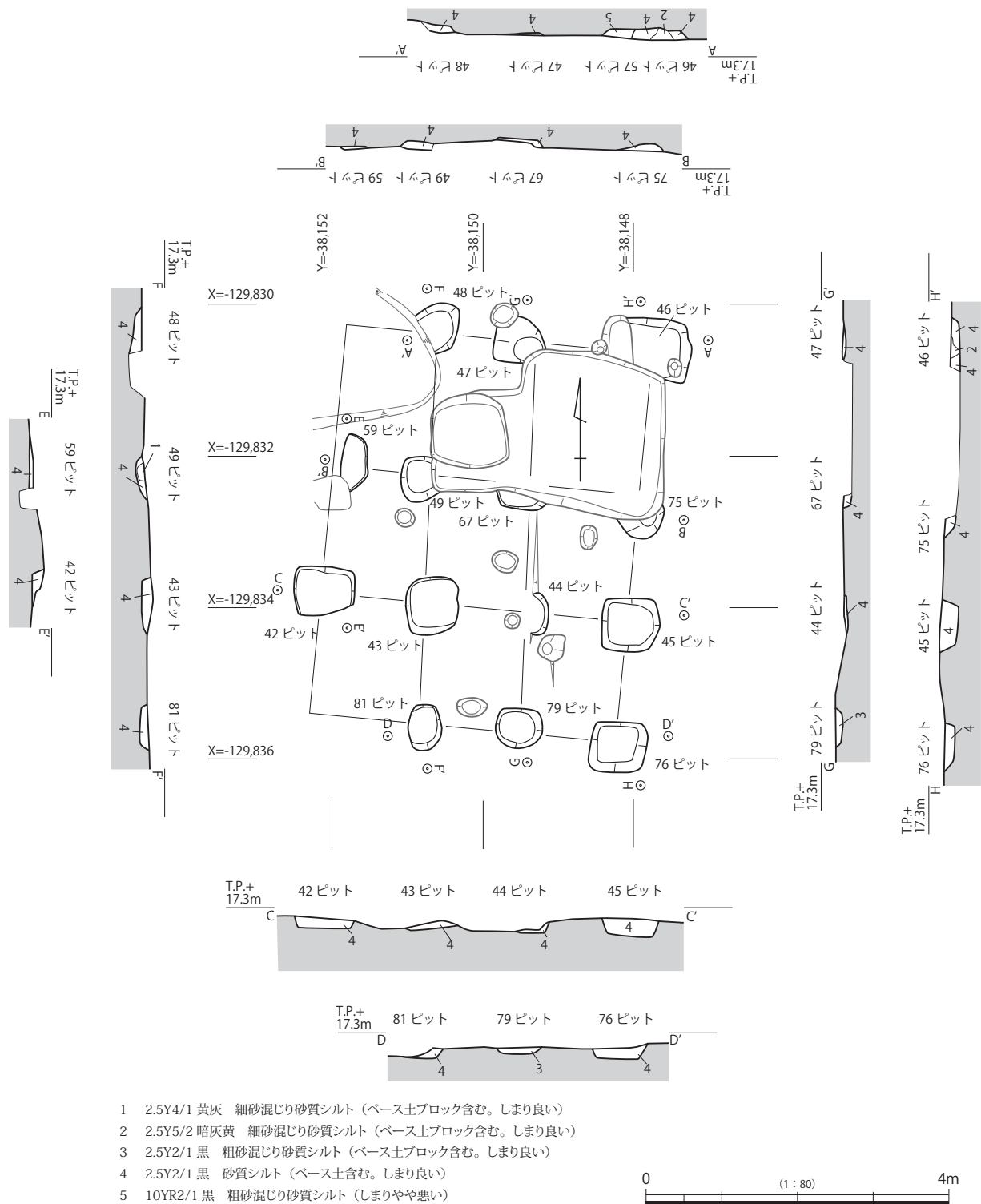


図 17 掘立柱建物 2 平・断面図 (総持寺遺跡 2021-1)

のピットからは目立った遺物は確認できなかった。

掘立柱建物 1 調査区南部に東西 3 間の柱列を確認した。西側 2 基のピットについては比較的遺存しており、隅丸方形の平面形状が明確であったが、東側 2 基については上部をさらに攪乱されており、わずかに最下部が遺存するのみであり、やや不定形の平面形状で検出した。また、東端の 23 ピットに南に直交する位置に 24 ピットが調査区外に延びて検出された。24 ピットは検出面の平面規模がやや小ぶりで断面形状もすり鉢状の断面形態を呈し、20 から 23 ピットと同一の建物を構成するピットのよ

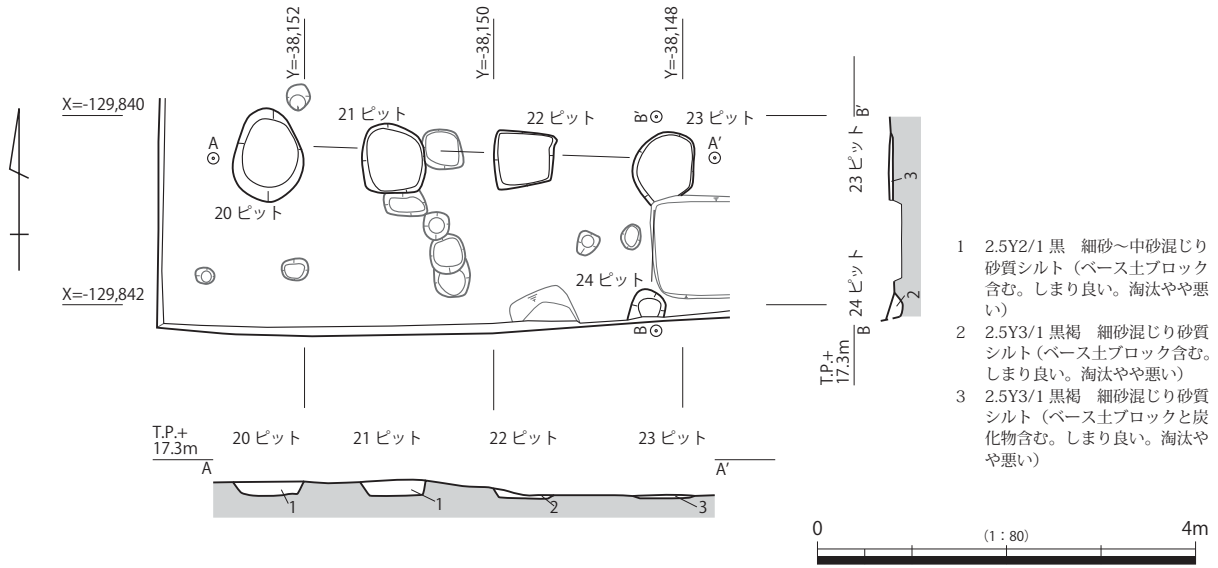


図 18 掘立柱建物 1 平・断面図（総持寺遺跡 2021-1）

うには見えないが、東西柱列が 23 ピット以東に伸びないこと、23 ピットの北に展開するようなピットが見えないことなどから、東西柱列と同一の建物を構成するピットである可能性も捨てきれない。そのように考えた時、この掘立柱建物 1 は 3 間以上× 1 間以上の建物が復原できる。また、柱列の西端の 20 から 22 ピットの南に直交する位置には攪乱が及び、ピットが存在した可能性も否定できない。これらのピットの中心間距離は 1.3 m から 1.4 m で、掘立柱建物 2 よりやや小さい程度で、建物の主軸も概ね北から東へ約 3° 振り、掘立柱建物 2 と主軸が近似する。これらのことから、2 棟の掘立柱建物は一定の同時期性があると想定される。

ピットの平面形状はやや不定形のもの（20 ピット）も認められるが、一辺約 70cm× 65cm の隅丸長方形を呈するものがある（21 ピット・22 ピット）。断面形状は、壁面は垂直に落ち方形を呈するもの（20 ピット・21 ピット・22 ピット）がある。遺物は 20 ピットよりわずかに出土するのみで遺構の機能・廃絶時期を推測できるものはない。

1 溝・16 溝 調査区北部において 1 溝を確認した。平面形状は一定した幅で南北に伸びており、南は途中で止まる若しくは上がるが、北は調査区外に延びる。1 溝は検出面よりの深さは約 15cm、1 m 程度の幅広な底面を確保する。埋土は土壌化の進行度によって 2 層に分けることができるが、いずれも淘汰の良くない層準であり、ある程度人為的に埋められたと考えられる。また、1 溝からは、弥生土器片がわずかに認められる。それ以降の土器片は出土しないことから、弥生時代の溝である可能性がある。ただし、その機能等は不明である。

1 溝南端部でわずかに円弧を描くように東に延びる 16 溝が切る。16 溝は東行して間もなく止まる

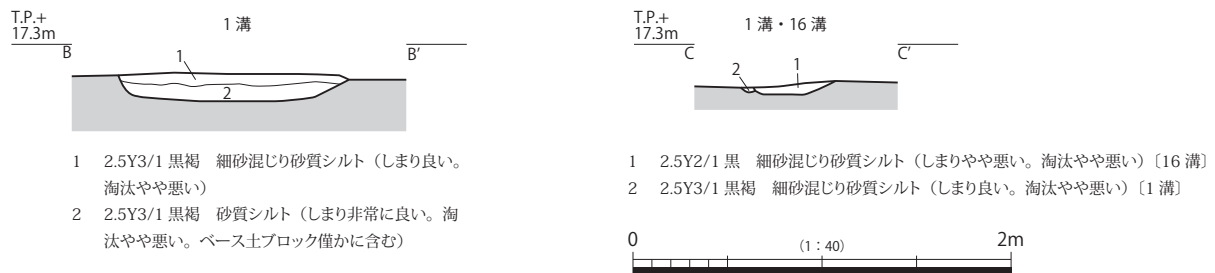


図 19 1 面遺構断面図（総持寺遺跡 2021-1）

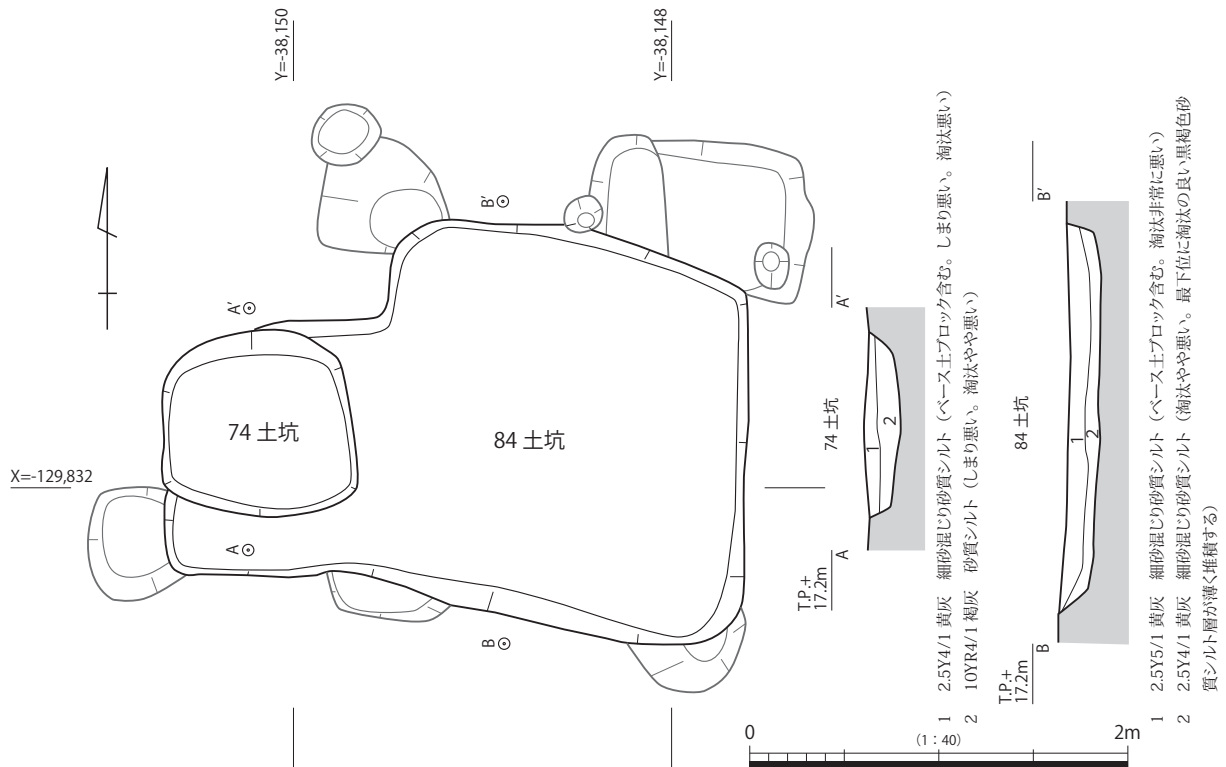


図20 74・84土坑 平・断面図(総持寺遺跡2021-1)

若しくは上がりの確認できなくなる。1溝と比較してやや幅が狭い。1溝との関係は先後関係が分かるのみで、遺物の出土もなく機能時期を含めて不明である。ただし、9ピットに切られることから、この土地に9ピットがつくられた時期にはすでに廃絶していたと考えられる。

74土坑・84土坑 74土坑及び84土坑は調査区中央部で検出した。74土坑は概ね円形の土坑で径約1mを測る。検出面より深さ20cmと比較的浅く、広い底面を持つ。埋土は淘汰度の違いで上下2層に細分したが、いずれもそれほど淘汰が良いわけではなく人為的に埋まったと考えられる。遺物は、灰釉陶器片や瓦器碗の細片が出土しており、13世紀以降に廃絶したことが推測される。

84土坑の平面形は北西角を大きく欠く東西に長軸を持つ長方形を呈する。検出面よりの深さは20cm弱と深くはないが、壁面は概ね垂直に近い角度で落ち平坦な底面を持つ。最下位には淘汰のやや良い黒褐色砂質シルトの薄層が堆積しており、掘削直後にはある程度開放されていたと考えられるが、その用途・機能は不明である。74土坑に切られ、掘立柱建物2の隅丸方形のピットを切ることから、先後関係が知られるのみで、機能時期についても不明である。

遺物 今次調査を通して出土した遺物は比較的少なく、その種類は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器である。いずれも破片であり、そのうち図化し得たものを図21に掲げた(18～24)。

18～22は弥生土器の底部片である。いずれも磨滅が著しく調整は不明である。23は灰釉陶器の底部片である。高台は極一部を除き欠損する。外面は一部に釉が垂れる以外は、露胎で回転ケズリを施す。内面上部に釉がかかるが、見込みは露胎である。おそらく重ね焼きによって焼成され、上に重ねた個体の高台によって釉薬が止まっているのだろう。24は備前焼甕である。口縁端部が丸く折り曲げられ玉縁状を呈する。肩部には三条の櫛描きによる沈線を巡らす。内面はへら状工具でかき取りながら丁寧に表面を調整している。間壁編年第IV期(間壁1991)と考えられ15世紀前半に位置づけられるであろうか。

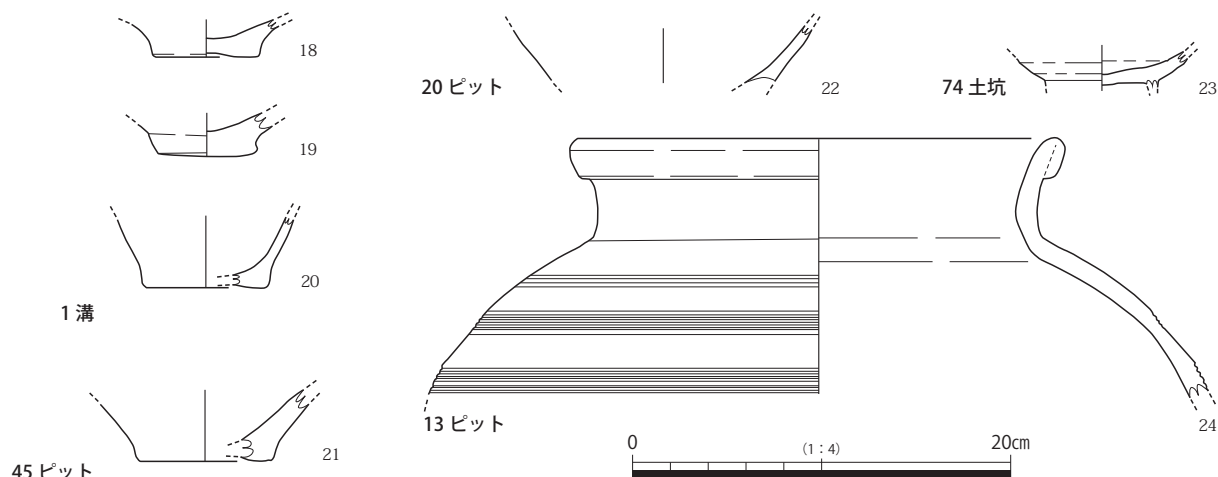


図 21 出土遺物（総持寺遺跡 2021-1）

まとめ 今次調査の結果、調査地に隅丸方形の掘方を持つピットによって構成される掘立柱建物が2棟以上建っていたことが判明した。これらの建物はその掘方等より古墳時代から古代に帰属するものと考えられ、とりわけ掘立柱建物2は総柱であることから、倉庫等の高床建物であったと想定される。

既往の調査では、国道171号線とJR京都線の間総持寺遺跡北部において、弥生時代から中世の遺構・遺物が確認されており、とりわけ古代の掘立柱建物等が稠密に分布することが報告されている。一方、JR京都線以南については、段丘崖下に調査事例があり弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が確認されるものの、古代以降については耕作地化されたという報告がある。これまでJR京都線以南の段丘南部の古墳時代から古代については不明な点が多くあったが、今次調査によって、古墳時代から古代の掘立柱建物などの遺構が段丘南端まで及ぶことが明らかとなった。

総持寺遺跡北部の掘立柱建物については、その主軸の向きに一定の傾向があることが指摘される（富田2007）。総持寺遺跡一帯が同一の傾向を示すとするには史資料が大きく不足しているが、北からわずかに東西に振る掘立柱建物群が総持寺遺跡の北部に多数存在し、奈良時代を最盛期とした飛鳥から平安時代前期に時期比定されていることから、今次調査で確認した掘立柱建物についても、当該期の範疇で考えるのが妥当であろう。今次調査の掘立柱建物が倉庫と考えられることから、一定の富の集積があったと想定でき、いずれかの在地有力氏族の勢力下にあったものと思われる。段丘南端の立地は、段丘崖下に広がる耕作地から富の象徴でもある高床の倉庫を見上げる形となることから、富や権力を誇示する好適地であったと推察される。このような土地に立地する掘立柱建物がどのような勢力に帰属するののかについては、今後の調査を俟って考究したい。その際、総持寺遺跡北部を基盤とする勢力と同一と捉えられるかといった問題や、総持寺建立の前史として藤原氏との関係が焦点となるであろう。

2. 総持寺遺跡 2021-2 (図 22・23)

調査地 三島丘一丁目31番18

調査面積 5.52㎡

調査期間 令和3年6月2日

調査担当 富田卓見

はじめに 三島丘一丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、1.2 × 4.6 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する南北道路路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別2層、細別6層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a～0-5a層）、1層：ベース土層と考えられる層準（1-1b層）の順に堆積が認められた。

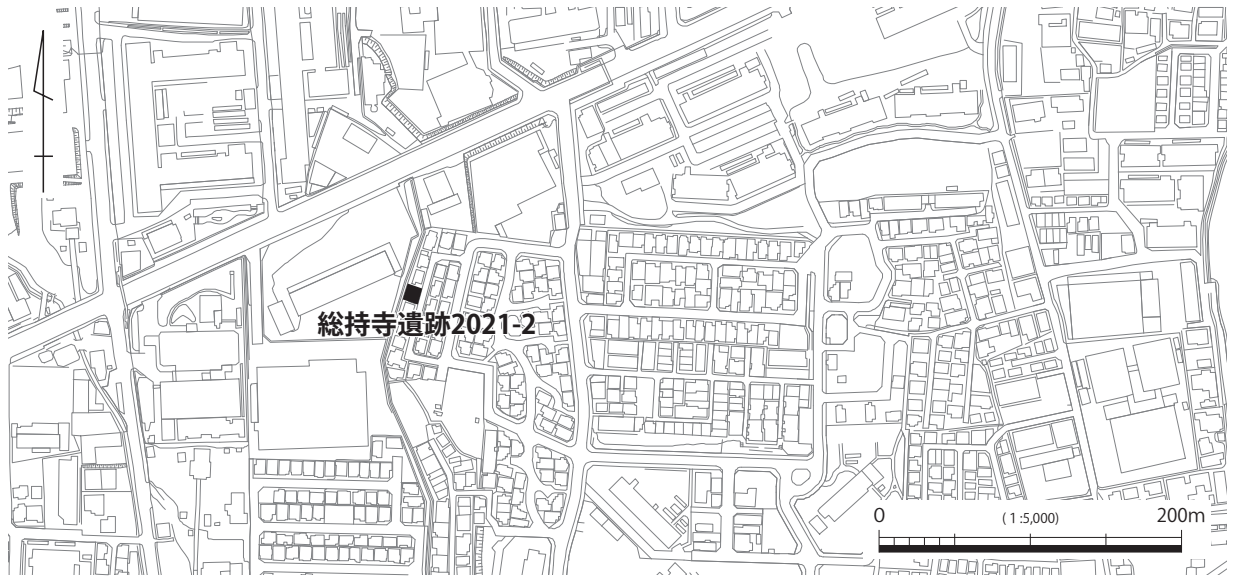


図22 総持寺遺跡調査地位位置図（2）

遺構・遺物 調査では、遺構の検出を期して0層下面において平面的な調査を行ったが、遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認することはできなかった。

まとめ 今次調査では、0層とした現代盛土層が厚く掘削が困難であったことに加え、湧水が著しく壁面崩落の危険が生じたが、かろうじて1層としたベース土層を確認することができた。結果として遺構・遺物は確認できず、本調査区においては既に攪乱を受けていたものと推定できる。

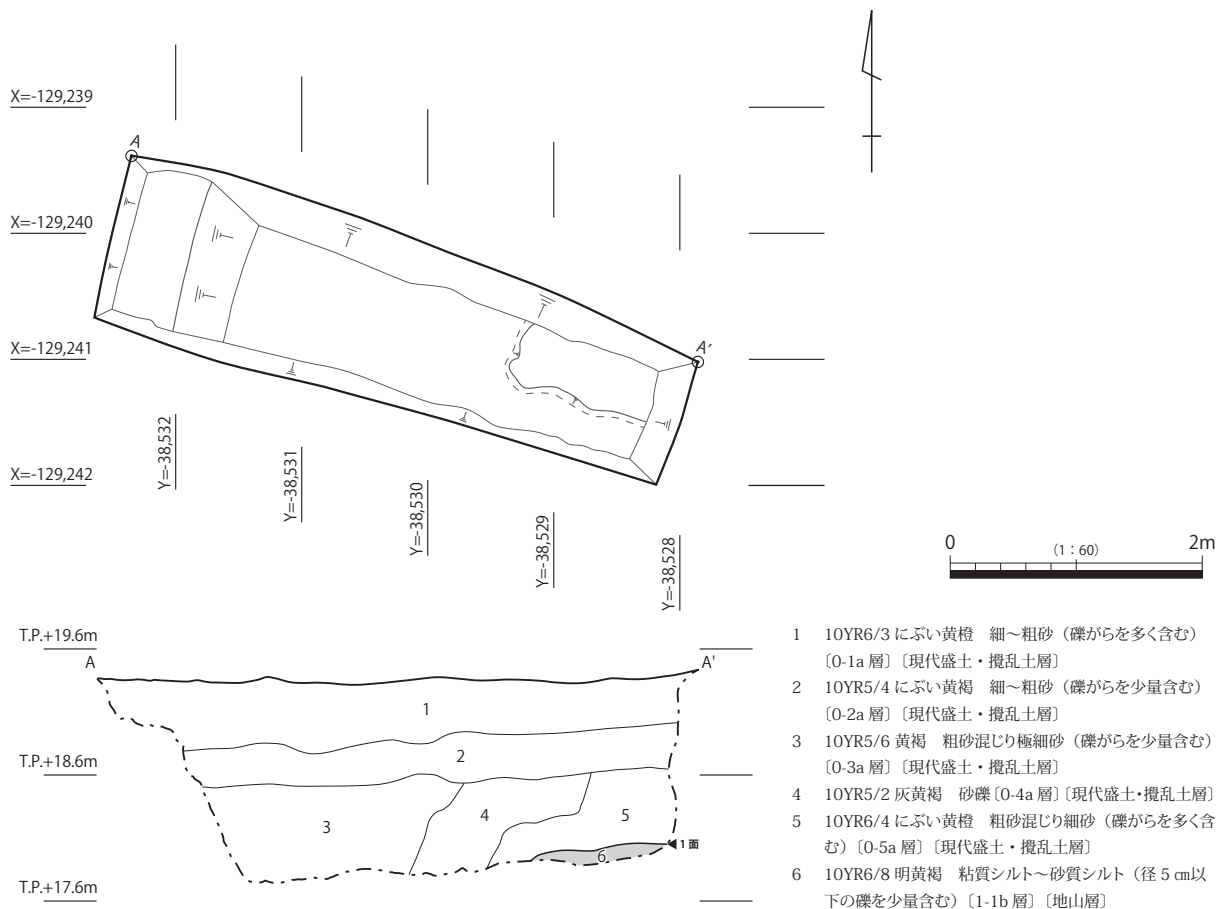


図23 平・断面図（総持寺遺跡 2021-2）

第4節 郡山遺跡

1. 郡山遺跡 2021-1 (図 24～26 図版 9)

調査地 郡三丁目628番6

調査面積 4㎡

調査期間 令和3年9月7日

調査担当 正岡大実



図 24 郡山遺跡調査地位置図

はじめに 郡三丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2 × 2 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する道路面とほぼ同じだが、東側の敷地と比較すると 1.5 m程度高い。

基本層序 調査地の基本層序は大別 6 層、細別 9 層に区分でき、上層から 0 層：現代盛土層・現代耕作土層 (0-1a～0-3a層)、1 層：近世～近代に形成されたと目される耕作土層 (1-1a層)、2 層：中世～近世に形成されたと目される耕作土層 (2-1a・2-2a層)、3 層：中世に形成されたとみられる耕作土層 (3-1a層)、4 層：中世以前に形成されたとみられる耕作土層ないし土壌層 (4-1a層)、5 層：古墳時代～古代以前に堆積したとみられるベース層 (5-1b層) の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査では、3-1a層を除去した面を 1 面、4-1a層を除去した面を 2 面として平面的な調

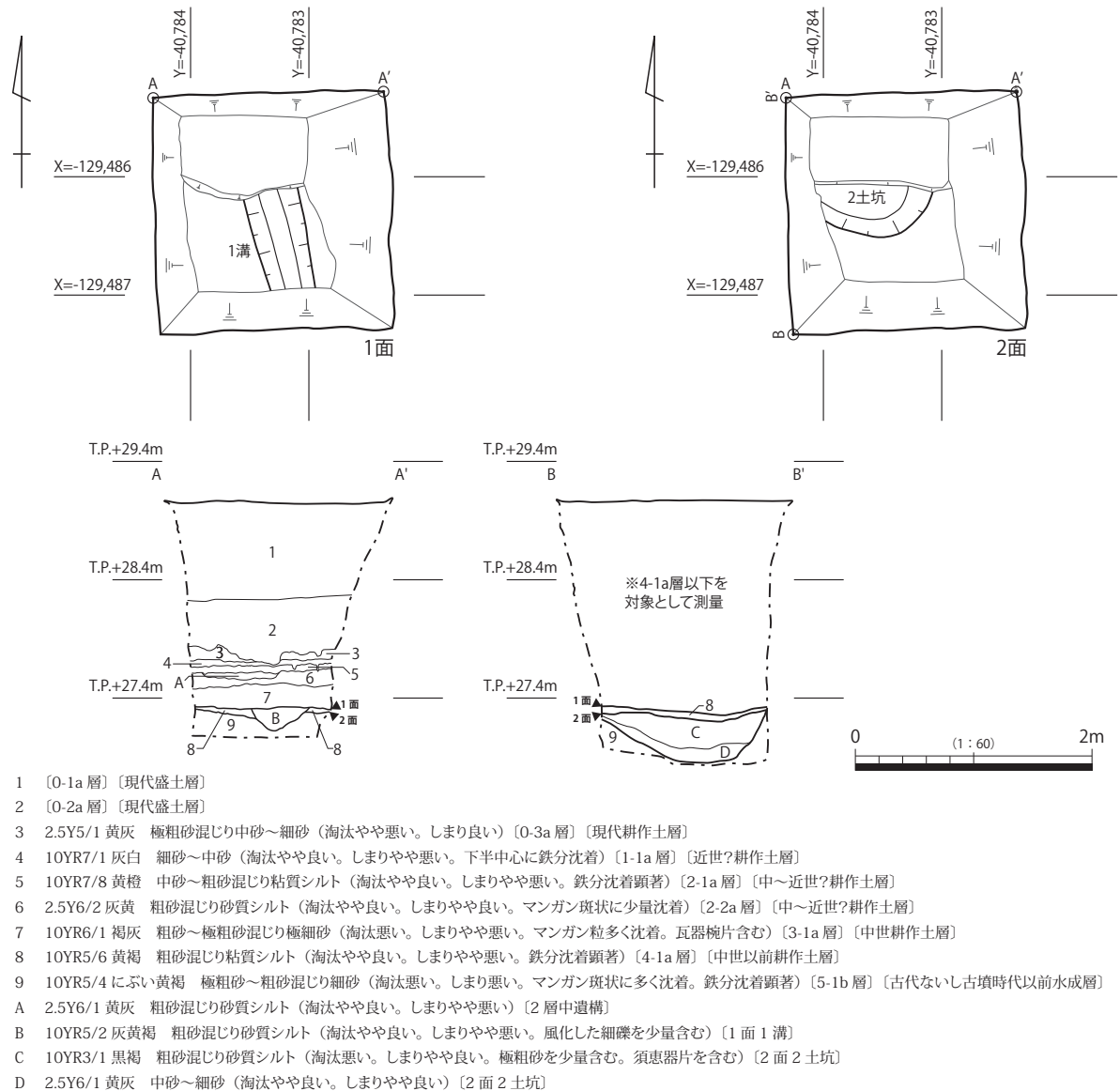


図 25 平・断面図 (郡山遺跡 2021-1)

査を実施し、結果として1面では南北方向の溝を1条、2面では土坑を1基検出した。1面に帰属する1溝は、幅0.35～0.45m、検出面からの深さ20cmを測る南北方向の直線的な溝である。溝内からは瓦器椀が出土した。また、2面で検出した2土坑は断面観察が不十分だったため本来の遺構面を超過して検出することとなったが、土坑の下部を平面的に調査することができた。土坑は平面円形で検出部分では直径1m以上、検出面からの深さ15cmを測るが、壁面断面の観察結果から本来の規模は直径1.4m以上、深さ40cmであったとみられる。土坑を充填する埋土は、淘汰が悪く暗色味の強い上層とやや淡い色調の淘汰の良い下層に二分でき、このうち上層から須恵器が出土した。

遺物は3-1a層中から瓦器片、1溝から土師器・須恵器・瓦器片、2土坑から須恵器片が出土した。このうち図示可能なものを図26に掲げた(25～27)。25・26は瓦器椀である。和泉型Ⅲ-3～Ⅳ-1期に属するとみられ、概ね13世紀前半に帰属するものとみられる。27は須恵器甕の体部片である。外面には平行タタキ、内面には同心円タタキが残る。焼成は甘く、淡い色調を呈する。体部の破片のみであるため時期を特定することは困難だが、古代に属するものと考えられる。

まとめ 2面の遺構面で調査を行い、遺構・遺物を確認することができた。周辺では調査事例が僅少

第3章 調査の成果

であり、遺跡の様相も明らかでなかったことから、重要な知見を加えることができた。なお、最終遺構面を形成する5層は、しまりの悪い極粗砂混じりの細砂を基調とする地層であり、段丘構成層とするにはやや不安を覚える層準である。今回の調査では、著しい湧水による壁面崩落の危険性が生じたため下位層の確認は為し得なかったが、今後の課題として周辺のさらなるデータの蓄積を通じて遺構面と地層の対比に努める必要がある。

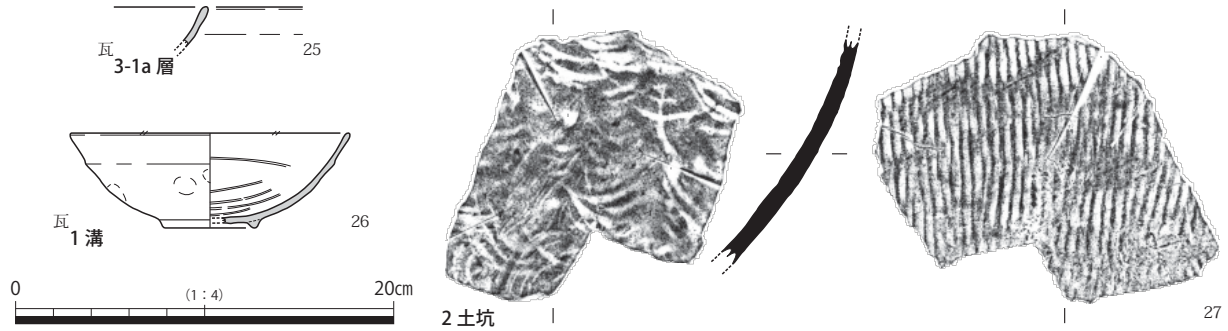


図26 出土遺物 (郡山遺跡 2021-1)

2. 郡山遺跡 2021-2 (図24・27・28 図版10)

調査地 郡三丁目628番5

調査面積 3.6㎡

調査期間 令和3年11月1日

調査担当 木村健明

はじめに 郡三丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2 × 1.8 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面とほぼ同じである。

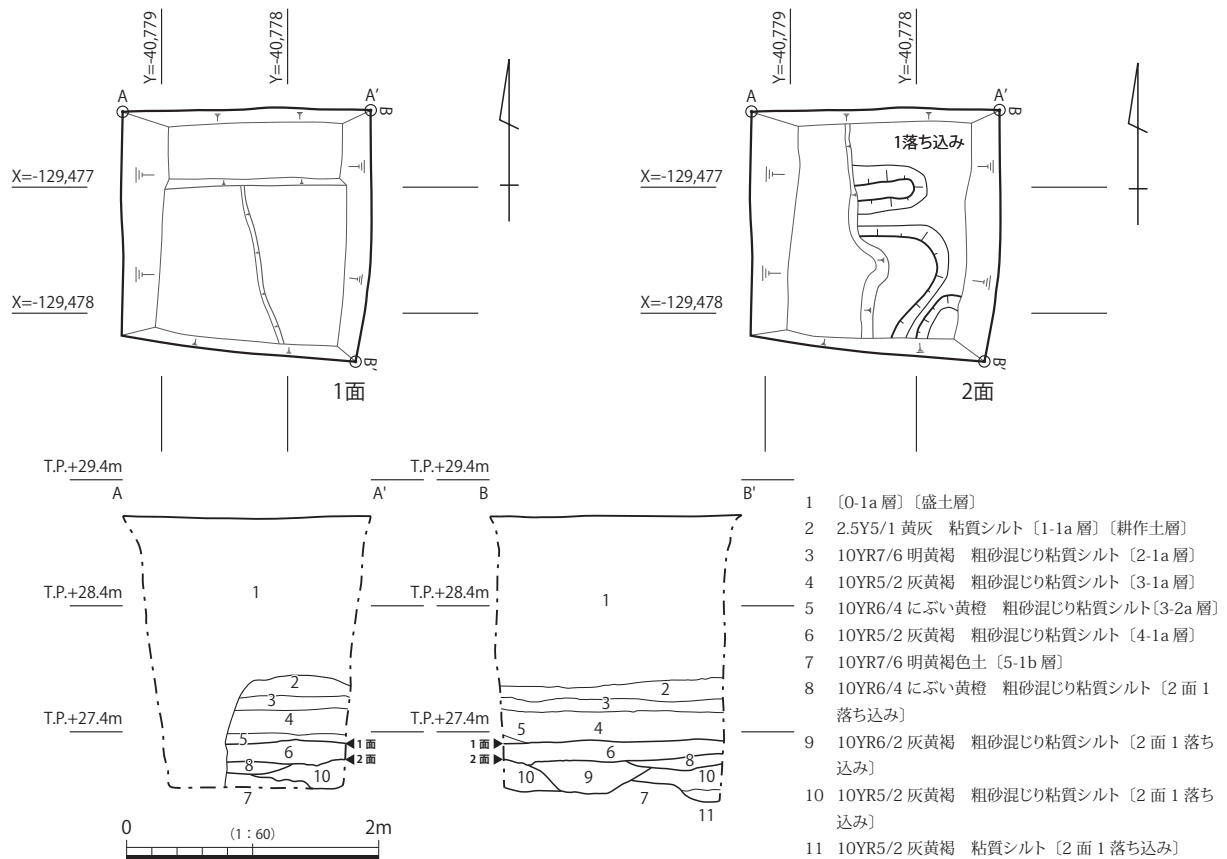


図27 平・断面図 (郡山遺跡 2021-2)

基本層序 調査地の基本層序は大別6層、細別7層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：現代耕作土層（1-1a層）、2層：近世に形成されたと目される耕作土層（2-1a層）、3層：中世以降に形成されたと目される耕作土層（3-1a・3-2a層）、4層：粗砂混じり粘質シルトを基調とする層準（4-1a層）、5層：淘汰の良い水成層ないし段丘構成層（5-1b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 前項に述べた郡山遺跡 2021-1 同様、遺構の検出を期して3-2a層下面を1面、4-1a層下面を2面として平面的な調査を実施し、結果として2面で落ち込みを1基確認した。1落ち込みは、大半が調査区外に延びるため全容を窺うことができず、平面及び掘方の断面形状も一定しない等、遺構の性格は定かでない。検出面からの深さはもっとも深い箇所で約40cmを測る。

遺物は、3-1a層から土師器・須恵器・瓦器片が、4-1a層中から黒色土器片が出土した。このうち図化可能なものを図28に掲げた（28・29）。28は瓦器椀である。前項の25・26同様、和泉型Ⅲ-3～Ⅳ-1期に属するものとみられる。29は微細片のため詳細は不明だが黒色土器A類椀とみられる。

まとめ 南側に隣接する郡山遺跡 2021-1 同様、2面の遺構面を確認し、下位の2面で落ち込みを検出した。今回の調査で確認できた地層断面は、郡山遺跡 2021-1 と比較して5-1b層の層相が大きく異なっている。詳細は周辺の調査成果を総合して遺構の分布状況を検討する必要があるが、周辺の遺構面の様相把握にあたり、重要な知見を加えることができたものと考えられる。

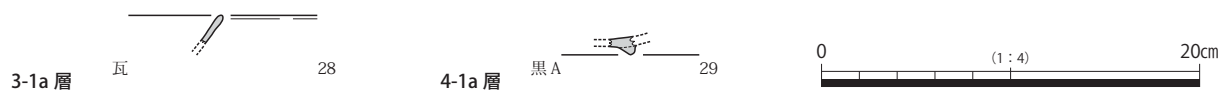


図28 出土遺物（郡山遺跡 2021-2）

第5節 中条小学校遺跡・沢良宜城跡

1. 中条小学校遺跡 2021-2（図29・30 図版11）

調査地 下中条町121番5

調査面積 6㎡

調査期間 令和3年12月16日

調査担当 木村健明

はじめに 下中条町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤には段差があり、南面する道路面とほぼ同じあるいは0.5m高く、調査区は高い地点に設定した。

基本層序 調査地の基本層序は5層に区分することができ、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：現代耕作土層（1-1a層）、2層：中世～近世に形成されたとみられる耕作土（2-1a層）、3層：遺物を含む褐灰色粘質シルト層（3-1a層）、4層：淘汰が良く粘性の強い水成層（4-1b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 3層下面において土坑を1基検出した。1土坑は長径0.85m、短径0.7mの長楕円形を呈し、検出面からの深さは13cmを測る。土坑の埋土は概ね3層に近似した土壌で充填されており、坑底付近にはベース土である4層を起源とするブロック土が少量混じる。

遺物は3層中から土師器片が出土したが、いずれも細片のため図示し得ず、帰属時期も判然としない。

まとめ 今回の調査では、3層としたいわゆる遺物包含層とその下面で遺構を確認することができた。既往の調査でも、同様の遺物包含層と遺構が検出されており、遺跡の様相を把握する上で重要な成果を加えることができたものと考えられる。



図 29 中条小学校遺跡調査地位置図

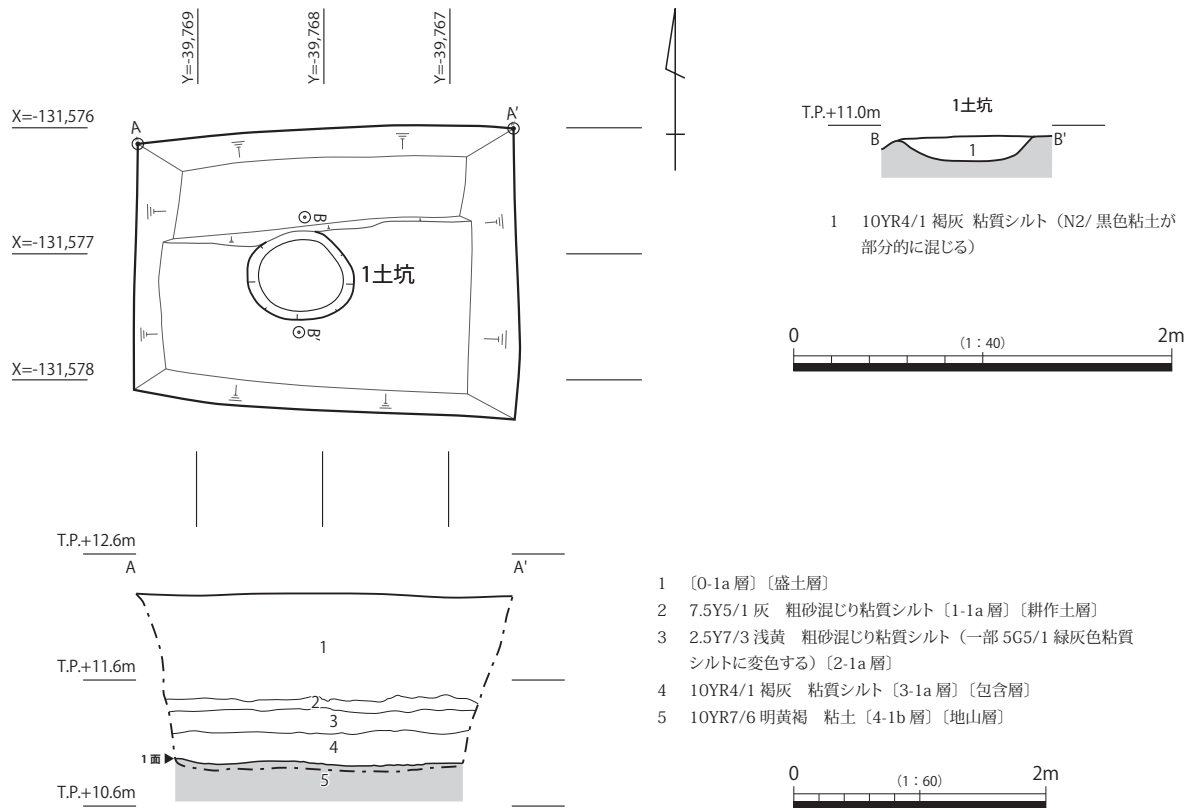


図 30 平・断面図 (中条小学校遺跡 2021-2)

2. 沢良宜城跡 2021-1 (図 31・32)

調査地 美沢町80番20

調査面積 4㎡

調査期間 令和3年4月12日

調査担当 正岡大実

はじめに 美沢町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×2mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する道路面より約0.2m高く、敷地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は0層：現代盛土層（0-1a～0-3a層）とした現代盛土層のみが認められた。著しい湧水により壁面崩落の危険が生じたため、以下の層準の確認は為し得なかったが、0-3a層中にはベース土層を構成すると思しき灰白色粘質シルトのブロックが多数認められたことから、本調査区においては本来の遺構面等は既に攪乱を受けていた可能性が高いと考えられる。

遺構・遺物 遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認することはできなかった。

まとめ 今次調査では、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

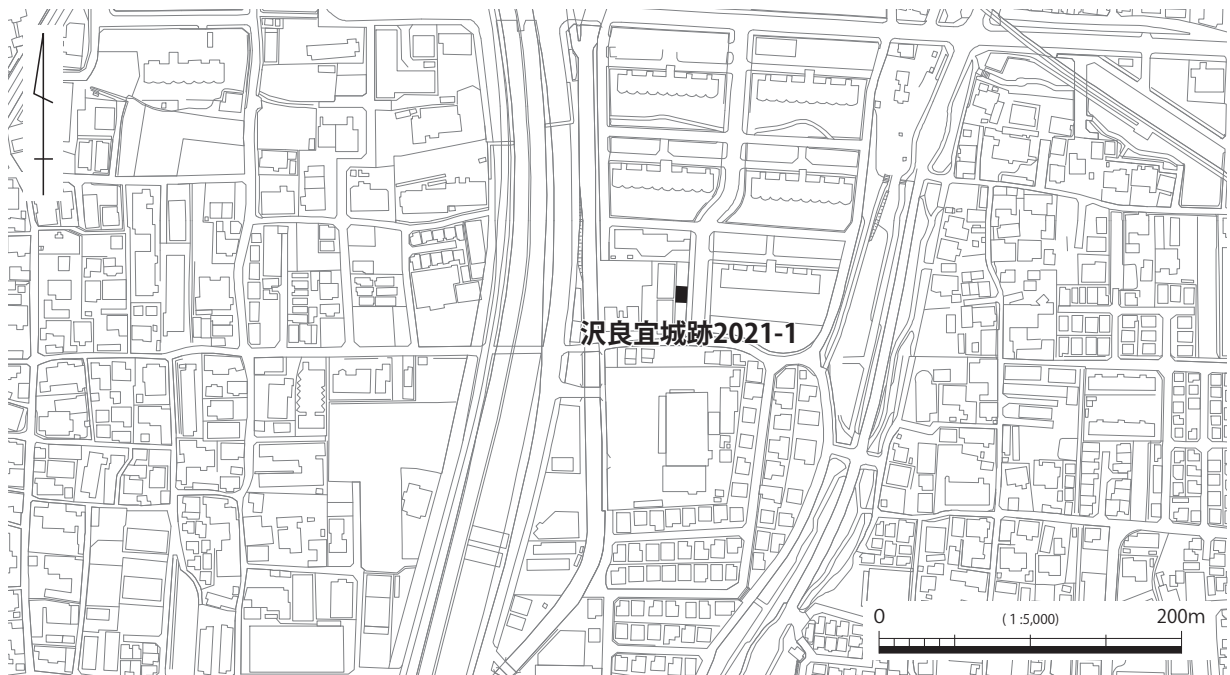


図 31 沢良宜城跡調査地位置図

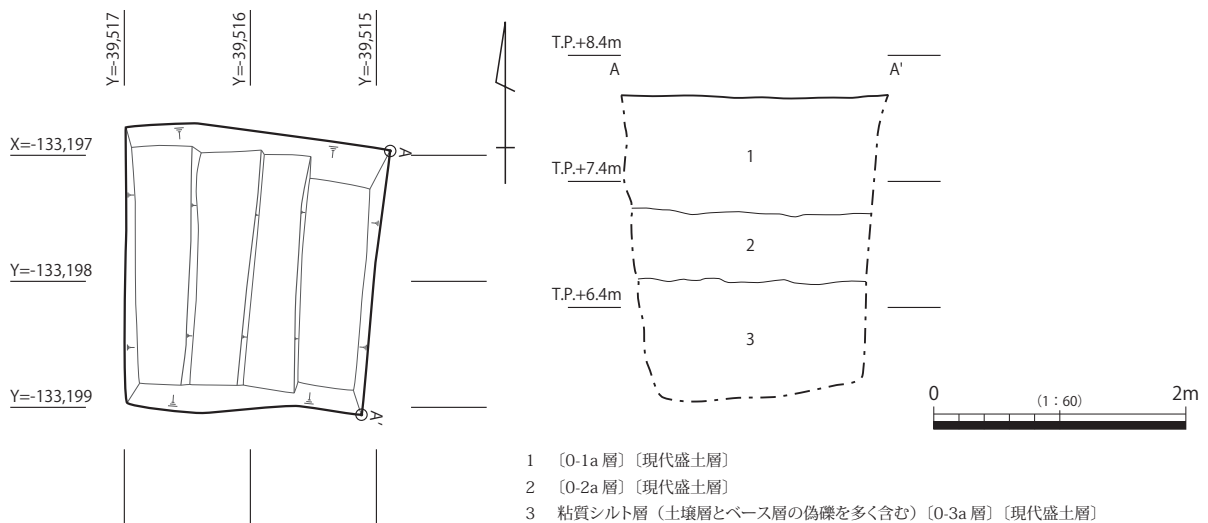


図 32 平・断面図 (沢良宜城跡 2021-1)

第6節 溝咋遺跡・牟礼東遺跡

1. 溝咋遺跡 2020-1 (図 33 ~ 35 図版 12)

調査地 五十鈴町229番8

調査面積 9㎡

調査期間 令和3年3月29日～3月30日

調査担当 富田卓見

はじめに 五十鈴町において計画された個人住宅の建築に伴い、敷地の南側に2×2.5 m (A区)、北側に2×2 m (B区)の調査区をそれぞれ設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面より約0.1～0.2 m高い。

基本層序 地層断面の観察の結果、いずれの調査区も同様の堆積状況が認められることを確認したため、ここでは一括して記述する。調査地の基本層序は大別4層、細別12層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a～0-3a層)、1層：近～現代耕作土層(1-1a・1-2a層)、2層：中世～近世に形成された可能性のある耕作土層(2-1a～2-5a層)、3層：中世以前に堆積したとみられる水成層(3-1b・3-2b層)の順に堆積が認められた。なお、3層下部の3-2b層は暗色味の強い粘質シルトであり土壌化が進行している可能性もあるが、湧水が激しく部分的な確認に留まったため詳細は明らかでない。

遺構・遺物 遺構の検出を期して2-5a層の下面において平面的な調査を実施したが、遺構は認められなかった。

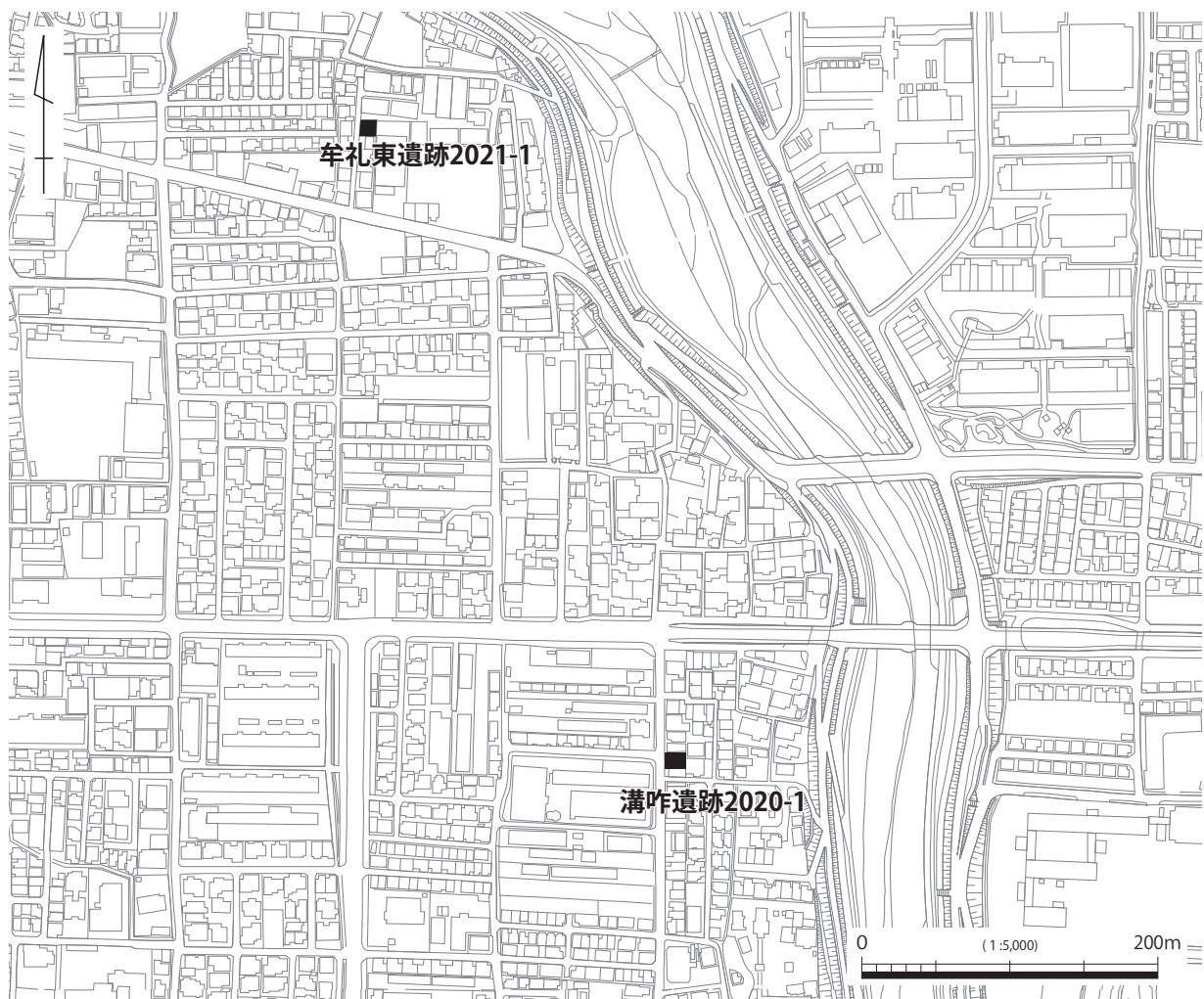


図 33 溝咋遺跡・牟礼東遺跡調査地位置図

遺物は、1層及び2層から土師器・瓦器等が出土した。細片が中心であるが、図示可能なものを図35に示した(30～33)。30は1層から出土した中世の土師器羽釜の口縁部片である。31・32の土師器小皿は細片のため口径の復元には至らなかったが、やや厚手で口縁端部の表現はやや退化が進行している。11世紀末～12世紀初頭の所産か。33は瓦器碗の底部片。小片のため詳細な帰属時期は決し難いが、やや縮小した断面三角形の高台が付され、12世紀後半に帰属するものとみられる。

まとめ 今次調査では遺構は確認できなかったものの、1～2層にかけて遺物を確認することができた。このことから、2層の形成時期は古代末～中世に求められる。さらに下位に位置する地層の確認は壁面崩落の危険性が生じたため為し得なかったが、周辺では既往の調査事例が少なく、重要な知見を加える結果となった。

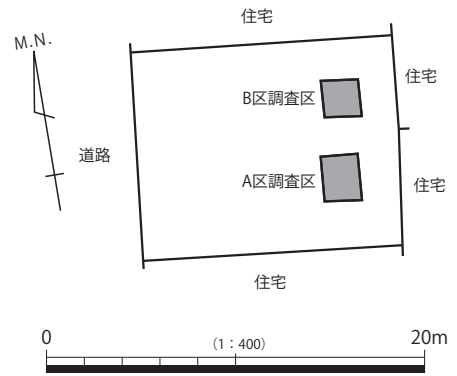


図34 調査区配置図(溝咋遺跡 2020-1)

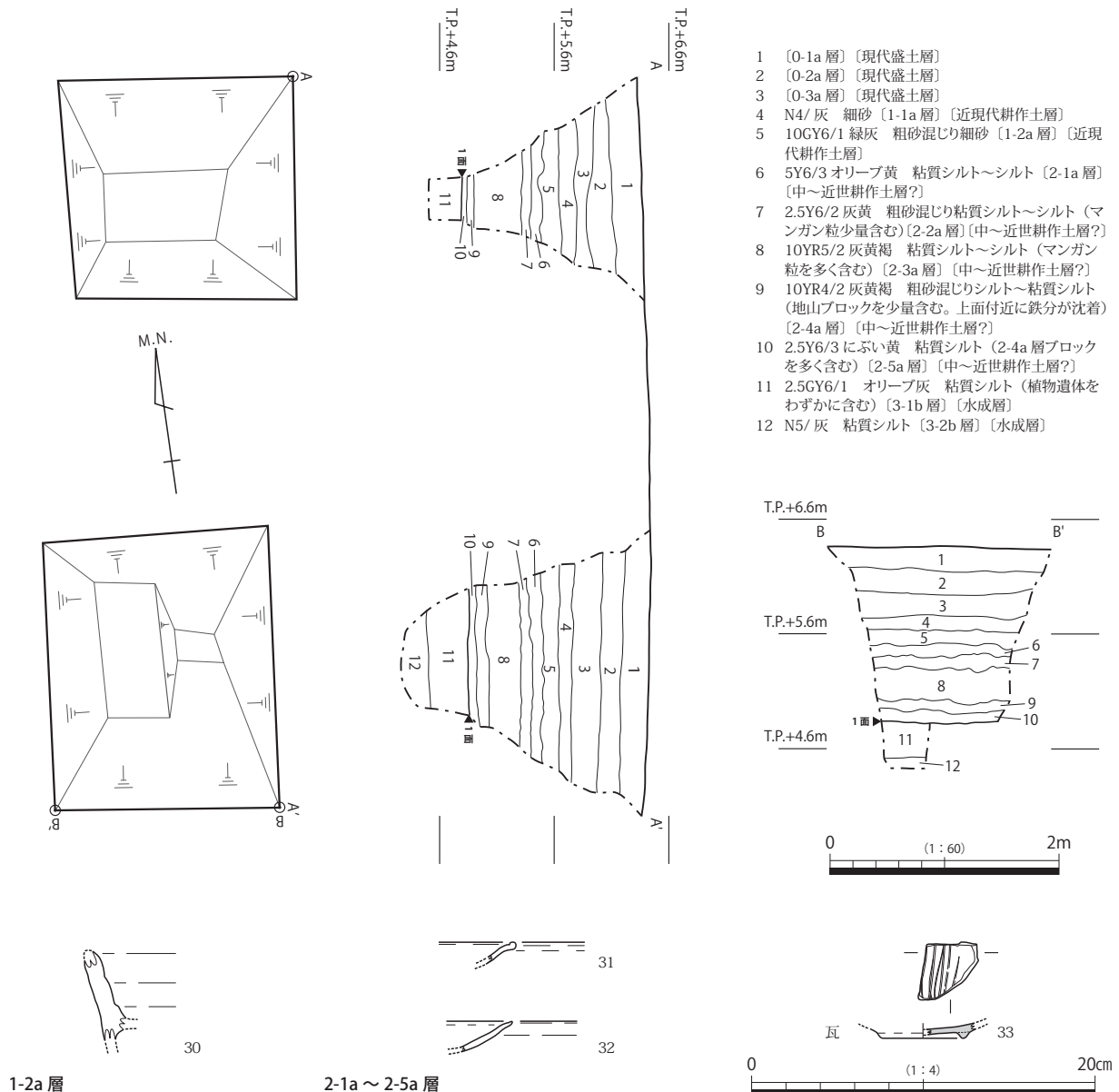


図35 平・断面図・出土遺物(溝咋遺跡 2020-1)

2. 牟礼東遺跡 2021-1 (図 33・36・37 図版 12)

調査地 寺田町27番2の一部

調査面積 5㎡

調査期間 令和3年4月8日

調査担当 富田卓見

はじめに 寺田町において計画された個人住宅の建築に伴い、2 × 2.5 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別4層、細別8層に区分でき、上層から0層：現代盛土層 (0-1a・0-2a層)、1層：近～現代耕作土層 (1-1a・1-2a層)、2層：中世～近世に形成された可能性のある耕作土層 (2-1a・2-2a層)、3層：中世以前に堆積したとみられる水成層 (3-1b・3-2b層) の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 遺構の検出を期して2-2a層の下面において平面的な調査を実施したが、遺構は認められなかった。

遺物は2層から土師器・須恵器・瓦器等が出土した。細片が中心であるが、図示可能なものを図37に示している (34～41)。34～37は2-1a層から、38～41は2-2a層からそれぞれ出土した。34・35は土師器小皿である。外面には1段ナデが施され、器表面の色調はいずれも乳白色を呈する。36は退化した高台を付す瓦器椀。37は白磁碗口縁部片である。34～36は13世紀中葉前後に帰属するとみられ、2-1a層の形成時期を示すとみても良いかもしれない。38は褐色を呈する土師器小皿である。39～41は瓦器椀である。細片ではあるが、楠葉型Ⅱ期、和泉型Ⅱ～Ⅲ期の12世紀後半に帰属するものとみられ、2-1a層出土土器よりは古相を示す傾向にあることが窺われる。

まとめ 今次調査では遺構は確認できなかったものの、2層より遺物を確認することができた。このことから、2層の形成時期は概ね中世に帰属するものと考えられる。周辺では既往の調査事例が少なく、重要な知見を加える結果となった。

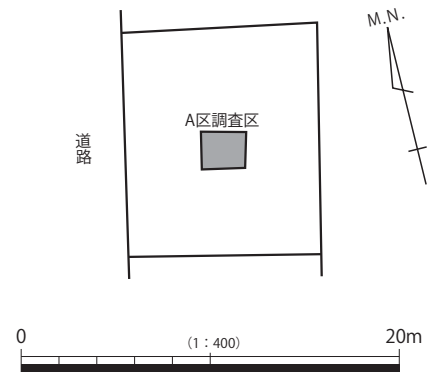


図 36 調査区配置図

(牟礼東遺跡 2021-1)

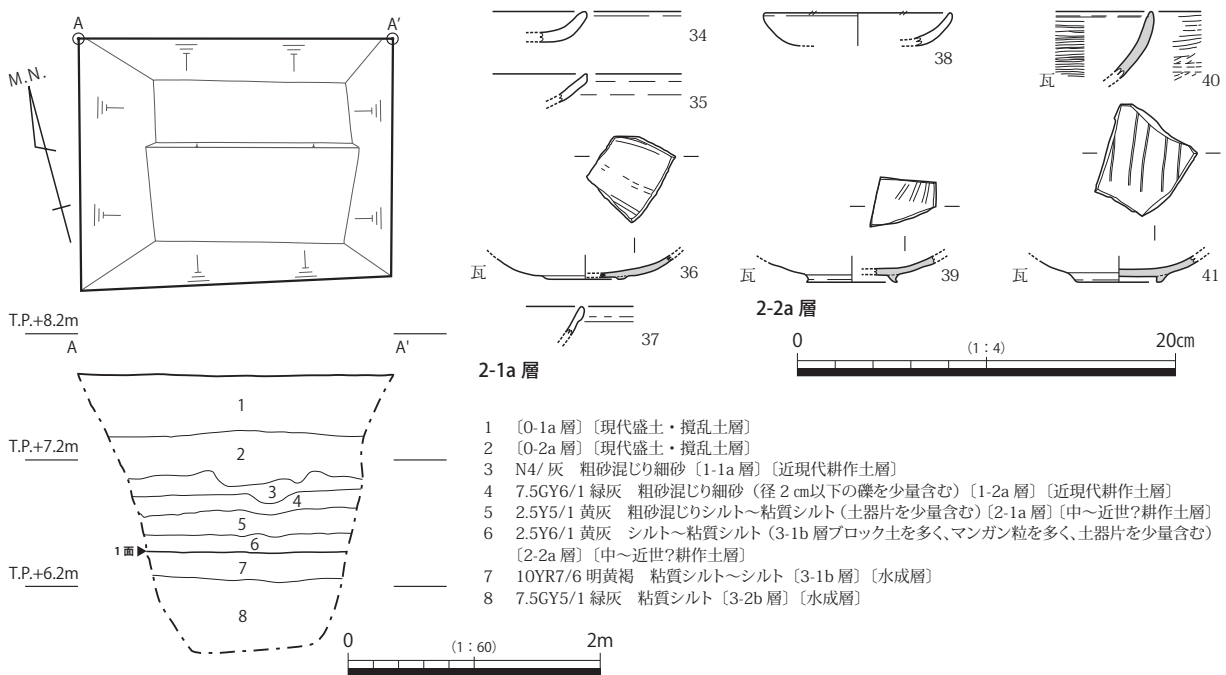


図 37 平・断面図・出土遺物 (牟礼東遺跡 2021-1)

第7節 東奈良遺跡 2020-2 出土木製品の自然科学分析

1. はじめに

本節では、昨年度概報（茨木市教育委員会 2021）に掲載した東奈良遺跡 2020-2 調査出土木製品の自然科学分析の結果を報告する。当該木製品は、弥生時代の遺構面（4-2a 層下面）で検出した方形周溝墓の主体部を構成する組み合わせ式木棺の部材である。木棺として遺存状態が良好であったのみならず、底板については扉材を転用したものの可能性が想定される等、自然科学分析も踏まえた詳細な時期の検討が必要と判断されたことから各部材について樹種同定を行うとともに、図 38 の資料については、放射性炭素年代測定法による年代測定も併せて実施した。

なお、当該分析等については、一般社団法人 文化財科学研究センターに委託（市費）して実施した。次項以後に掲載した記述は、同センター金原美奈子氏、金原裕美子氏による報告文をもとに茨木市教育委員会が編集を加えたものである。

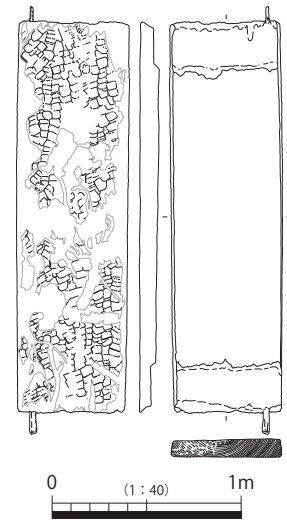


図 38 分析対象資料

2. 試料

試料は、東奈良遺跡 2020-2 より出土した木棺の底板、側板、小口板などの部材 4 点である。なお、棺底の部材は扉の転用材である。

3. 樹種同定

(1) 方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアケオス（Mount-Quick “Aqueous”：大道産業）で封入し、プレパラートを作製する。観察は生物顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって 40～1000 倍で行った。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

(2) 結果

分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

- ・コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15 細胞高であるが多くは 10 細胞高以下である。

以上の特徴からコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 30m、径 80cm に達する。

(3) 所見

同定の結果、東奈良遺跡の木棺部材はいずれもコウヤマキであった。

コウヤマキは木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽・保存性も高く、特に耐湿性に優れ、針葉樹の中では最も加工が容易な材である。コウヤマキは弥生時代から古墳時代にかけて近畿地方中央部で木棺や刳物などに用いられ、律令期に柱を中心に建築部材に利用されたが、中世からは大きな材が取れなくなった

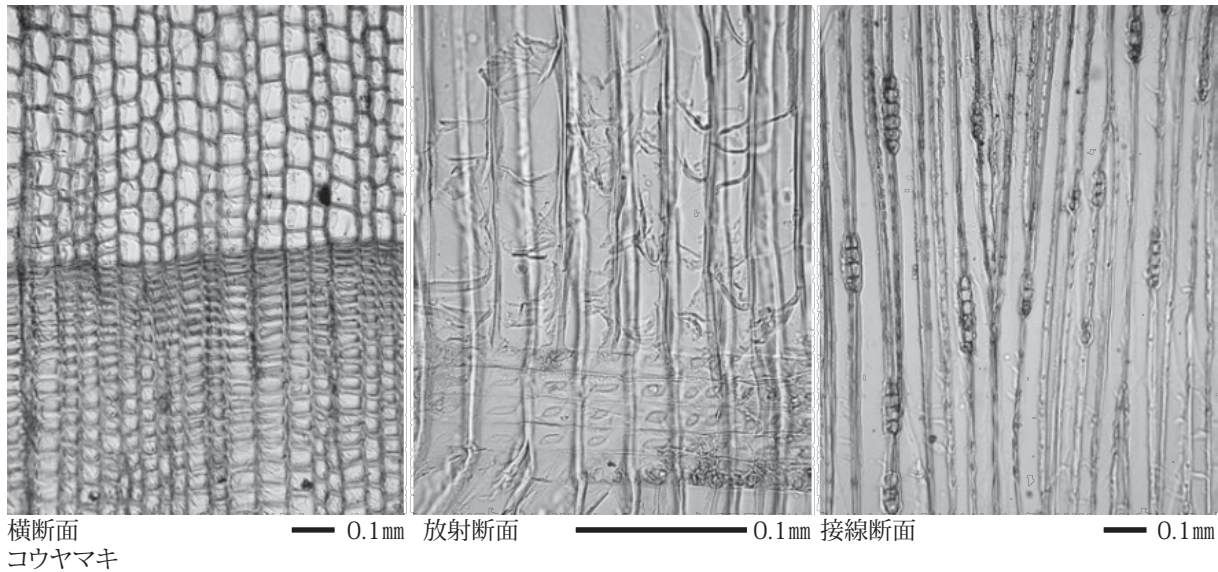


図 39 対象試料顕微鏡写真

のか類例は少ないものの、下駄などの日用品や器具に多様に用いられるようになる。本遺跡の底板は全長 226cm、幅 57cm、厚さ 10cm ととても大きく、大径木の Kouyama 材を手に入れられる時期であったと考えられる。

Kouyama は福島県以南に分布する常緑高木である。適潤性であるが乾燥した環境にも耐え、尾根、急峻地または岩盤上にも生育する。本遺跡で同定された樹木は当時遺跡の近隣地域に生育しており、地域的な流通によってもたらされたと推定される。

4. 放射性炭素年代測定

(1) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(3) 算出方法

- 1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した

値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- 2) ^{14}C 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- 3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- 4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.3\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(4) 測定結果

年代測定の結果、弥生時代中期頃に相当する。木棺の底板は扉材を転用したもののため、棺の時期はこれより新しい時期と考えられる。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-201373	東奈良棺底	木片	AAA	-22.78 ± 0.2	2,140 ± 20	76.58 ± 0.22

[IAA登録番号: #A445]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-201373	2,110 ± 20	76.92 ± 0.22	2,143 ± 22	341calBC - 323calBC (13.5%) 201calBC - 150calBC (45.9%) 133calBC - 118calBC (8.9%)	349calBC - 312calBC (19.1%) 206calBC - 94calBC (72.2%) 75calBC - 56calBC (4.1%)

[参考値]

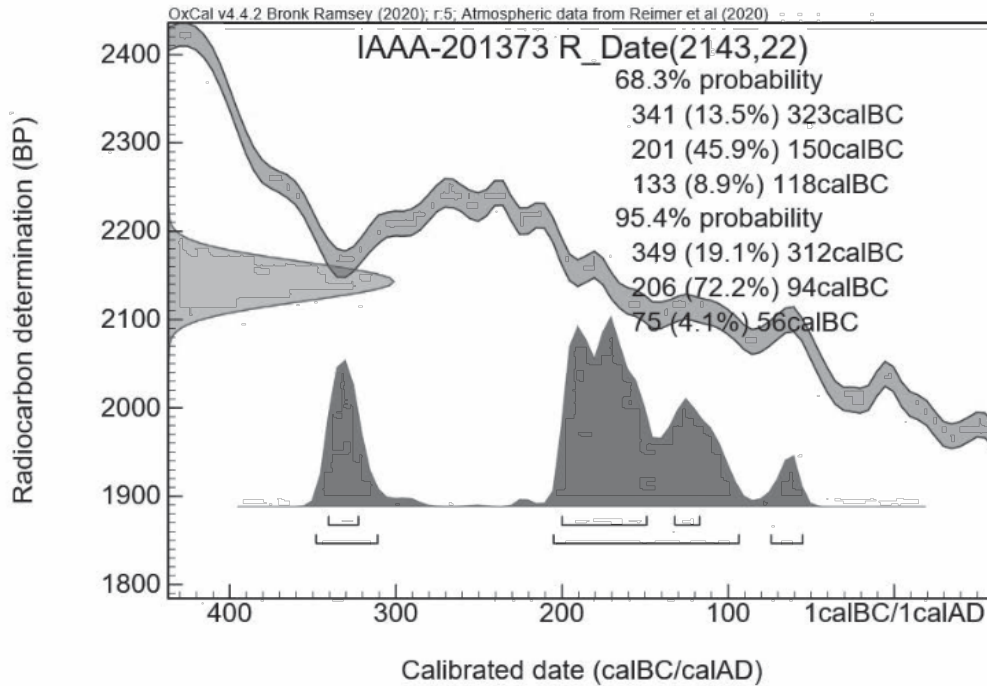


図 40 暦年較正結果（東奈良遺跡 2020-2 木棺底板）

〔参考文献〕

- 伊東隆夫・山田昌久 2012 『木の考古学』 雄山閣 p.449.
- 茨木市教育委員会 2012 『平成 21 年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2019 『平成 30 年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報—平成 30 年度国庫補助事業—』
- 茨木市教育委員会 2020 『令和元年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報—令和元年度国庫補助事業—』
- 茨木市教育委員会 2021 『令和 2 年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報—令和 2 年度国庫補助事業—』
- 大阪府教育委員会 2007 『総持寺遺跡Ⅱ』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2014 『総持寺遺跡 3』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2017 『総持寺遺跡 4』
- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998 『総持寺遺跡調査報告書』
- 財団法人大阪府文化財センター 2004 『総持寺遺跡Ⅱ』
- 佐伯浩・原田浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』 文永堂出版 p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』 文永堂出版 p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社 p.176.
- 島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣 p.296.
- 富田卓見 2007 「総持寺遺跡で検出した古代掘立柱建物に関する一考察」『総持寺遺跡Ⅱ』 大阪府教育委員会
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究特別第 1 号』 植生史研究会 p.242.
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

写 真 图 版

1. 茨木遺跡 2020-7
調査区北壁断面（南から）



2. 茨木遺跡 2020-8
1面完掘状況（東から）



3. 茨木遺跡 2020-8
調査区東壁断面（西から）





1. 茨木遺跡 2021-1
調査区南壁断面（北から）



2. 茨木遺跡 2021-2
1面完掘状況（東から）



3. 茨木遺跡 2021-2
調査区西壁断面（東から）

1. 駅前遺跡 2021-1
1面完掘状況（西から）



2. 駅前遺跡 2021-1
調査区東壁断面（西から）



3. 駅前遺跡 2021-1
1面1ピット断面（北から）





1. 駅前遺跡 2021-2
1面完掘状況（南から）



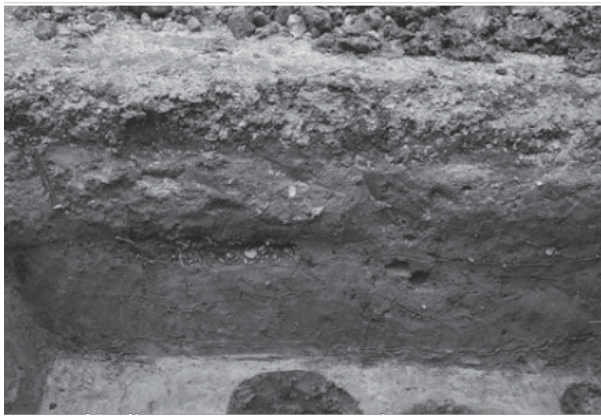
2. 駅前遺跡 2021-2
調査区北壁断面（南から）



3. 駅前遺跡 2021-2
1面2土坑断面（北から）



1. 春日遺跡 2021-2 1面完掘状況 (東から)



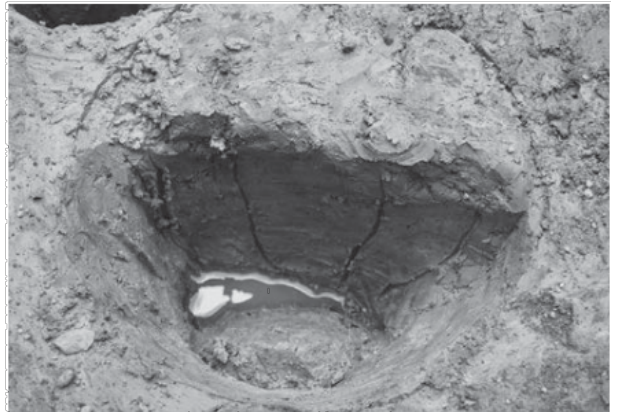
2. 春日遺跡 2021-2 調査区西壁断面 (東から)



3. 春日遺跡 2021-2 1面1ピット断面 (東から)



4. 春日遺跡 2021-2 1面2ピット断面 (東から)



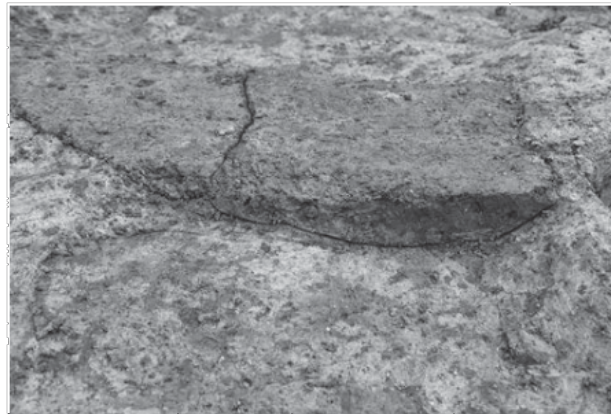
5. 春日遺跡 2021-2 1面5ピット断面 (東から)



1. 総持寺遺跡 2021-1 調査区北部1面完掘状況（東から）



2. 調査区北部東壁断面（北西から）



3. 1溝・16溝断面（南東から）



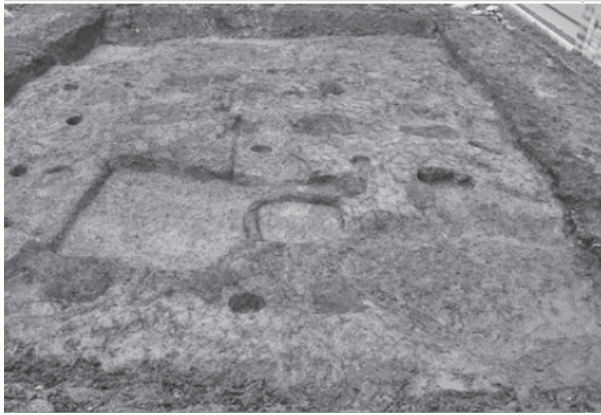
4. 1溝断面（北から）



5. 3ピット断面（東から）



1. 総持寺遺跡 2021-1 調査区中央部1面完掘状況（北から）



2. 掘立柱建物2検出状況（北から）



3. 調査区中央部東壁断面（北西から）



4. 46ピット断面（南東から）



5. 45ピット断面（東から）



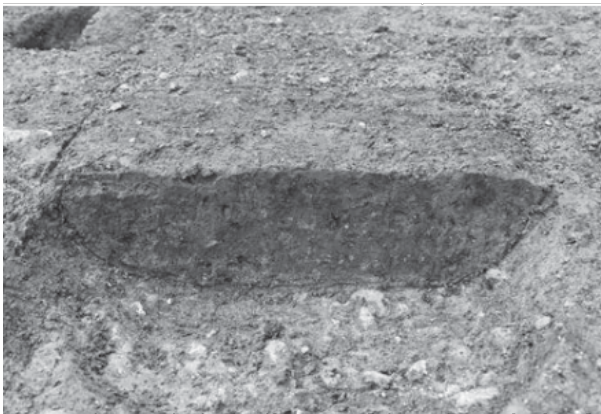
1. 総持寺遺跡 2021-1 調査区南部1面完掘状況（東から）



2. 掘立柱建物1検出状況（北西から）



3. 20ピット断面（北から）



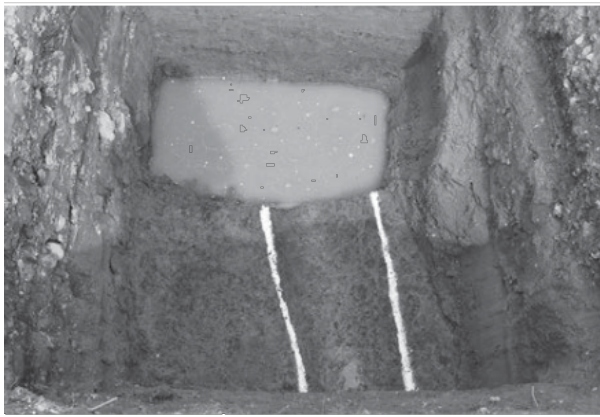
4. 21ピット断面（北から）



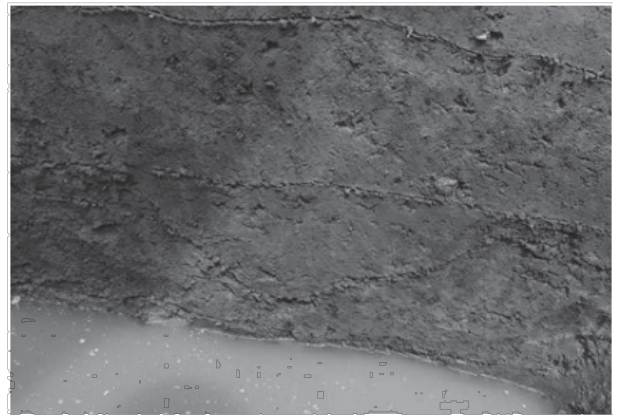
5. 23ピット断面（北西から）



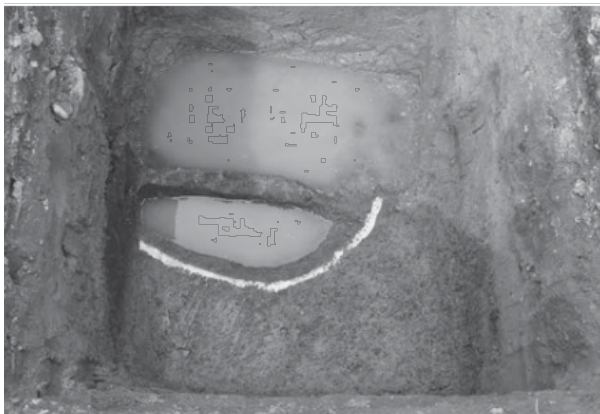
1. 郡山遺跡 2021-1 調査区北壁断面（南から）



2. 郡山遺跡 2021-1 1面完掘状況（南から）



3. 郡山遺跡 2021-1 1面1溝断面（南から）



4. 郡山遺跡 2021-1 2面完掘状況（南から）



5. 郡山遺跡 2021-1 2面2土坑断面（東から）



1. 郡山遺跡 2021-2
調査区北壁断面（南から）



2. 郡山遺跡 2021-2
1面完掘状況（西から）



3. 郡山遺跡 2021-2
2面完掘状況（西から）

1. 中条小学校遺跡 2021-2
1面完掘状況（西から）



2. 中条小学校遺跡 2021-2
調査区北壁断面（南から）



3. 中条小学校遺跡 2021-2
1面1土坑断面（西から）





1. 溝咋遺跡 2020-1 A区1面完掘状況(南から)



2. 溝咋遺跡 2020-1 B区1面完掘状況(西から)



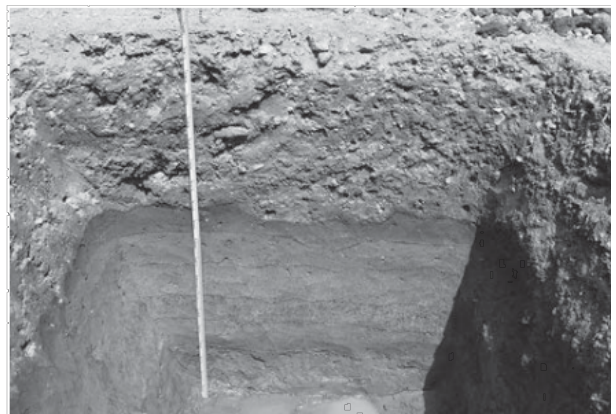
3. 溝咋遺跡 2020-1 A区調査区東壁断面(西から)



4. 溝咋遺跡 2020-1 B区調査区東壁断面(西から)



5. 牟礼東遺跡 2021-1 1面完掘状況(東から)



6. 牟礼東遺跡 2021-1 調査区北壁断面(南から)

報告書抄録

ふりがな	れいわさんねんどいばらきしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう—れいわさんねんどこっこほじょじぎょう—
書名	令和3年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報—令和3年度国庫補助事業—
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第82集
編著者	木村健明、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、正岡大実、宮西貴史
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号
発行年月日	令和4年（2022年）3月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
茨木遺跡2020-7	新庄町	34° 48′ 50″	135° 34′ 19″	20210112	6㎡	個人住宅 建築工事
茨木遺跡2020-8	新庄町	34° 48′ 50″	135° 34′ 19″	20210113	6㎡	
茨木遺跡2021-1	宮元町	34° 49′ 11″	135° 34′ 28″	20210405	4㎡	
茨木遺跡2021-2	大手町	34° 48′ 57″	135° 34′ 19″	20210713	5㎡	
駅前遺跡2021-1	駅前四丁目	34° 49′ 02″	135° 34′ 00″	20210525	6㎡	
駅前遺跡2021-2	駅前四丁目	34° 49′ 02″	135° 34′ 00″	20211027	6㎡	
春日遺跡2021-2	上穂東町	34° 49′ 13″	135° 33′ 37″	20210715	5㎡	
総持寺遺跡2021-1	総持寺一丁目	34° 49′ 44″	135° 34′ 58″	20210420 ～ 20210531	136㎡	兼用住宅 建築工事
総持寺遺跡2021-2	三島丘一丁目	34° 50′ 03″	135° 34′ 43″	20210602	5.52㎡	個人住宅 建築工事
郡山遺跡2021-1	郡三丁目	34° 49′ 55″	135° 33′ 14″	20210907	4㎡	
郡山遺跡2021-2	郡三丁目	34° 49′ 55″	135° 33′ 14″	20211101	3.6㎡	
中条小学校遺跡2021-2	下中条町	34° 48′ 47″	135° 33′ 55″	20211216	6㎡	
沢良宜城跡2021-1	美沢町	34° 47′ 54″	135° 34′ 05″	20210412	4㎡	
溝咋遺跡2020-1	五十鈴町	34° 48′ 50″	135° 35′ 16″	20210329 ～ 20210330	9㎡	
牟礼東遺跡2021-1	寺田町	34° 49′ 04″	135° 35′ 08″	20210408	5㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	遺構	遺物	特記
茨木遺跡2020-7	集落跡	中世	—	土師器、瓦器、磁器	
茨木遺跡2020-8	集落跡	中世	土坑、ピット	土師器、瓦器、陶器	
茨木遺跡2021-1	集落跡	中世	—	—	
茨木遺跡2021-2	集落跡	中世	溝	土師器、須恵器、瓦、陶器	
駅前遺跡2021-1	集落跡	弥生・古墳	溝、ピット	土師器	
駅前遺跡2021-2	集落跡	弥生・古墳	土坑、ピット	—	
春日遺跡2021-2	集落跡	古墳	ピット	土師器、瓦器、瓦質土器	
総持寺遺跡2021-1	集落跡	弥生・古墳	掘立柱建物、溝、土坑、ピット	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器	
総持寺遺跡2021-2	集落跡	弥生・古墳	—	—	
郡山遺跡2021-1	集落跡	その他	溝、土坑	土師器、須恵器、瓦器	
郡山遺跡2021-2	集落跡	その他	落ち込み	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器	
中条小学校遺跡2021-2	集落跡	弥生・古墳	土坑	土師器	
沢良宜城跡2021-1	城館跡	中世	—	—	
溝咋遺跡2020-1	集落跡	弥生・古墳 ・奈良・平安	—	土師器、瓦器	
牟礼東遺跡2021-1	集落跡	中世	—	土師器、須恵器、瓦器	

茨木市文化財資料集 第82集

令和3年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

—令和3年度国庫補助事業—

発行日 令和4年(2022年)3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷 株式会社トゥユー